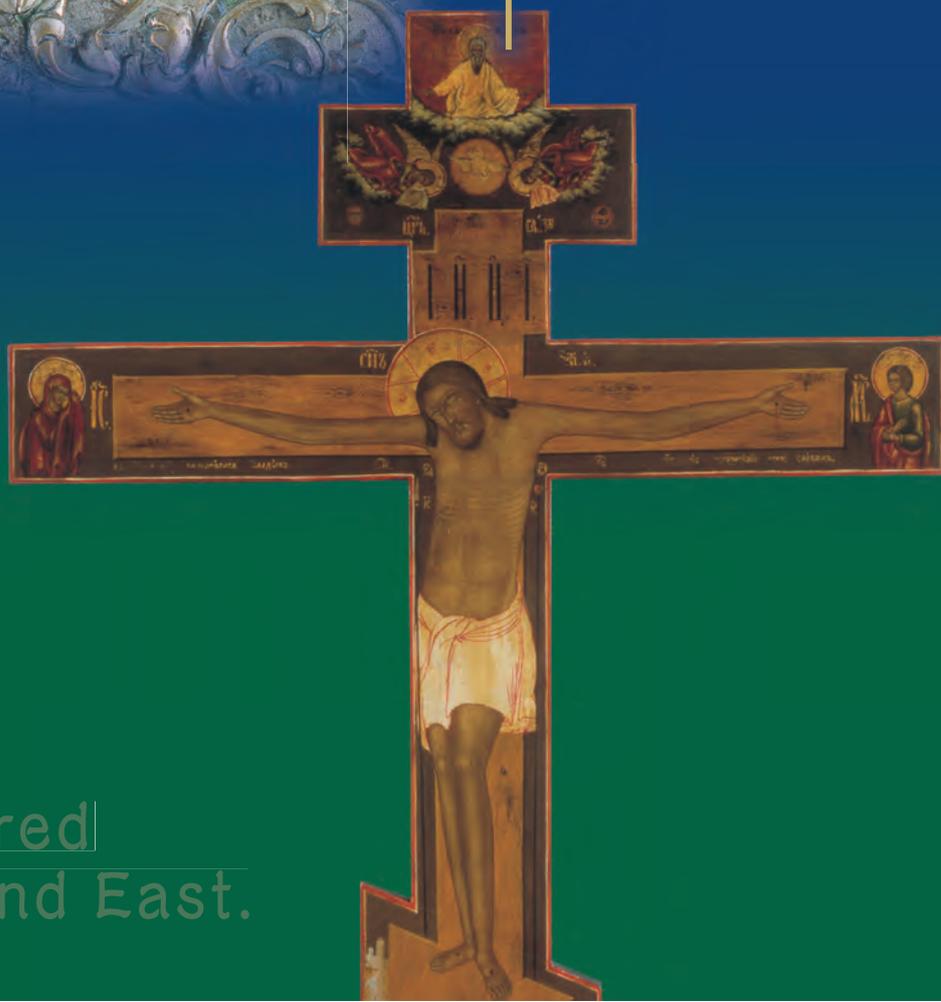


イコン

—東西聖像画の世界—



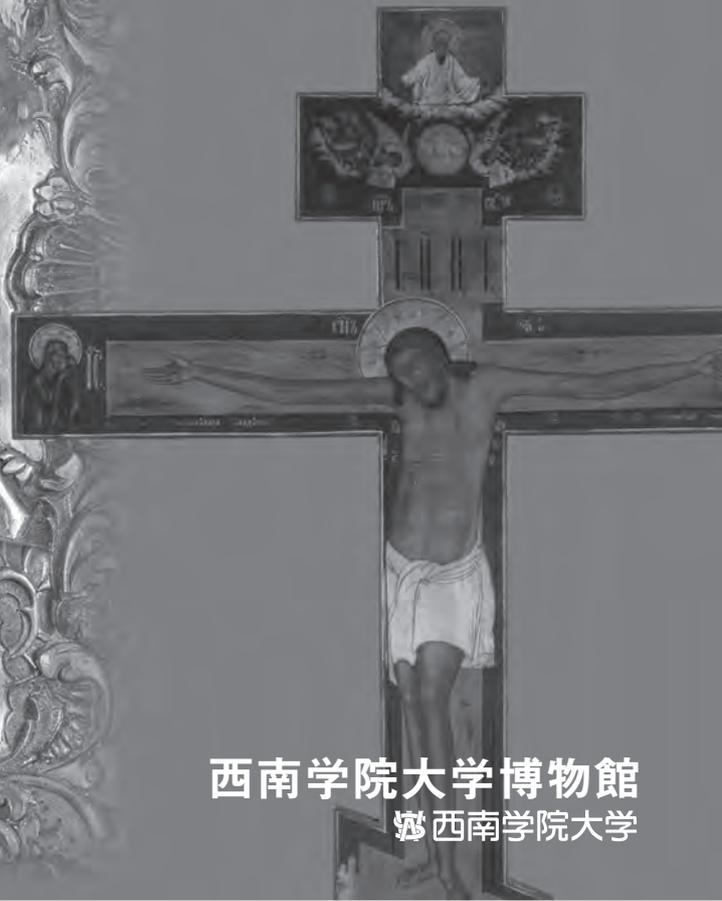
ICON

The World of Sacred
Images in West and East.

大学博物館共同企画シリーズⅠ

イコン

—東西聖像画の世界—



西南学院大学博物館
西南学院大学

ごあいさつ

全国各地には文教施設として博物館が設置されています。設置者も独立行政法人や財団法人、県市町村立の博物館など様々で、企業メセナの機関として設けられていることもあります。各館の運営方針に従って、それぞれ特色のある取り組みがおこなわれていることは周知のところでしょう。

大学を設置主体とする大学博物館も、近年、数多く開館し、国立・私立を問わずそれぞれ設置目的や建学の精神にもとづいた活動がおこなわれております。これは大学の地域貢献であり、学内教職員や学生はもとより、大学関係者、博物館関係者、地域住民の方々、県外の観光客にいたるまで利用されるようになってきています。大学博物館が「社会への開かれた大学」を具現化する取り組みを精力的におこなっている成果といえます。

本学博物館は本年5月に開館5周年を迎え、次のステージに向かって取り組んでおります。その一環として、大学博物館を有する大学同士が連携し、質の高い研究成果の還元と、情報発信を兼ねた新しい展覧会を企画しました。これまで、本学博物館では「九州のキリスト教シリーズ」や「ジュダイカ・コレクション」などのシリーズをおこなってきましたが、これに類する展覧会となりました。

本展覧会は、東京都町田市にあります、玉川大学教育博物館との共同企画として、本学も所蔵する「イコン」を共通テーマに開催することとなりました。玉川大学の所蔵するロシアやイタリア、ギリシャのイコンに、本学所蔵のフィリピン、ルーマニアなどのイコンをあわせた大規模なものとなりました。各地で異なる聖像画の世界をご鑑賞いただければと存じます。

5年目に入った本学博物館の新しい取り組みをご理解いただくとともに、これからもご支援賜れば幸いです。最後となりましたが、協力いただきました玉川大学教育博物館長をはじめ、スタッフの皆様に対しまして衷心より御礼申し上げます。

2011(平成23)年11月2日

西南学院大学博物館

館長 高倉 洋彰

ごあいさつ

このたび、大学博物館同士の連携により、研究と博物館活動の活性化を図るために、西南学院大学との共同企画で本展覧会を開催する運びとなりましたことは、誠に喜ばしい限りであります。

玉川学園は、1929(昭和4)年に創立者小原國芳により「全人教育」を第一の教育信条に掲げて開校しました。現在K-12(Kindergarten to 12th・幼稚部から高等部までの一貫教育)、大学(文学部・農学部・工学部・経営学部・教育学部・芸術学部・リベラルアーツ学部)・大学院まで約1万人が、約59万㎡の広大なキャンパスに集う総合学園に発展し、幅広い教育活動を展開しています。

小原國芳は、子どもが実物に触れることにより生まれる感動や発見を大事に思い、創立当初から教育に関わる実物資料を収集してきました。そして、創立40周年にあたる1969年に収集してきた資料をもとに、当館の前身となる「教育博物資料室」を大学図書館内に設置しました。以来学園全体の附属施設としての位置づけから大学の附置機関へと移行し、さらに博物館相当施設の指定を受けるなど、博物館としての機能や活動は充実するとともに、社会的にみて館の存在基盤も徐々に確立されてきました。

当館は設置の経緯とその後の収集から教育史資料、芸術資料、民俗資料、考古資料をはじめとする歴史や芸術の分野のコレクションを中心にして博物館活動を続けながら機能の充実をはかってきました。今後も大学博物館としての使命をもとに、個性や特長を伸ばし、学園内外の人々にとって魅力的な館となるには、すぐれた専門性、豊かな活動、効率よい運営を常時備える必要があると考えております。

玉川学園は、時代の先駆けとなる教育のかたちを常にグローバルな視野で捉え、よりよい教育環境の構築を目指しています。当館もこれに連動すると同時に、大学博物館ならではの博物館活動を展開するために、尽力していく所存であります。

最後になりましたが、この展覧会を開催するためにご努力していただいた、西南学院大学の館長はじめスタッフの皆様にご心から御礼申し上げます。

2011(平成23)年11月2日

玉川大学教育博物館

館長

玉井日出夫

大学博物館共同企画

シリーズ I

大学は様々な学術情報、知的財産を有している。これからの大学のあり方として、地域社会と連携していくことはもちろん、あらゆる情報を発信していくことが求められている。そうしたなかで、「社会に開かれた大学」の窓口のひとつである大学博物館では、博物館を拠点におこなわれる取り組みを通じて、研究成果の公開がおこなわれている。

大学博物館は“知の拠点”として、大学における調査研究の成果を公開し、発信している。これまで本学博物館でもキリスト教に関する特別展を開催し、関連して公開講演会などをおこなってきた。本シリーズは大学の垣根を越えて、ふたつの大学博物館が連携することで新しい知識(+ α)を創出し、質の高い展覧会(学び場)を提供することを目的としている。

本展覧会開催により、大学博物館同士の相互理解はもちろん、研究成果や情報の共有化、そして大学博物館の質的向上を図るものとする。また、“大学博物館ネットワーク”の構築を目指していき、大学博物館の取り組みの新しいモデルケースとなるよう、今後シリーズ化して展開していく。

開催趣旨

ギリシャ語で「像・姿」を意味するイコン(ICON)。イコンは礼拝用画像であるとともに美術作品としても高い評価を得ている。また、イコンの製作意図も「見えるものを通じて、見えないもの(神的世界)へと人びとを導くもの」であるため、各国の信仰形態や習慣も色濃く反映されている。

本展覧会は、玉川大学教育博物館から協力を得て、ロシアやギリシャ、イタリアのイコンを借用し、展示する。また、本学博物館が所蔵するフィリピンやエチオピアなどのイコンとあわせて展示することにより、イコンのとらえかたや宗教観の共通性や相違点を示すことができる。

キリスト教の伝播過程や受け入れ態勢が異なるなか、各国が抱える歴史的背景も様々である。こうしたなかで作られたイコンには各国の事情が反映された数多くの要素が含まれている。

両大学が所蔵するできる限り多くの地域の作品を集め展示することとなった。本展覧会を通じて聖像画に込められた想いや作風などの違いを直接感じていただける機会になればと考えている。

目次

ごあいさつ

西南学院大学博物館 館長 高倉 洋彰	2
玉川大学教育博物館 館長 玉井 日出夫	3

大学博物館共同企画シリーズ I	4
開催趣旨	4
目次・凡例	5

本編

I. 玉川大学教育博物館所蔵アイコン	6
II. 西南学院大学博物館所蔵アイコン	27
II. 玉川大学教育博物館と西南学院大学博物館の取り組み	39
玉川大学教育博物館の取り組み	
玉川大学教育博物館 教授 柿崎 博孝	40
西南学院大学博物館の取り組み	
西南学院大学博物館 学芸員 安高 啓明	42
寄稿 アイコン製作過程と意義	
玉川大学教育博物館 教授 柿崎 博孝	45

出品目録	47
関連講演会	48

凡例

- ◎本図録は西南学院大学博物館秋季特別展、大学博物館共同企画シリーズI「アイコン—東西聖像画の世界—」〔会期：2011年(平成23年)11月2日(水)から12月10日(土)まで〕開催にあたり、作成したものである。
- ◎図版番号は出品目録番号に対応するが展示順番とは必ずしも一致しない。
- ◎本図録に掲載している写真は各所蔵先の許可なく転載・複写することを認めない。
- ◎本図録の資料解説について、玉川大学教育博物館所蔵のものは柿崎博孝(玉川大学教育博物館教授)、西南学院大学博物館所蔵のものは安高啓明(本学博物館学芸員)がおこない、全体編集を安高啓明が担当した。
- ◎英文翻訳には中松沙織(本学大学院国際文化研究科研究生)を主担当として、下記の臨時職員があたった。
- ◎編集・翻訳補助には貞清世里(本学大学院国際文化研究科博士後期課程)、平川知佳(本学大学院国際文化研究科博士後期課程)、中尾祐太(本学大学院国際文化研究科博士後期課程)、小林史奈(本学大学院国際文化研究科研究生)があたった。

I

玉川大学教育博物館所蔵イコン

玉川大学教育博物館が所蔵するイコンのなかから、ロシアを中心にギリシャ、イタリアの聖像画を紹介する。玉川大学のイコンコレクションは、東方正教会圏で敬拝されたイコンで構成されている。イコンは同じ主題であっても時代や国により描き方、とらえられかたに違いがある。一枚のイコンに込められた宗教観を見出していく。



玉川大学教育博物館イコンコレクションの概要

玉川大学教育博物館は、ロシア・イコンとギリシア・イコンを中心に、16世紀から19世紀にかけてのイコンを現在71点所蔵している。イコンとは、ギリシア語のエイコン(肖像・似像)を語源とし、広義ではキリスト教において神、天使、聖人を祈念し、あるいは象徴としてつくられた絵や像のことを言う。狭義では特に東方正教会で発達した聖像画のことをさし、当館のコレクションは、この東方正教会圏で敬拝されたイコンで構成されている。

イコンは、ビザンティン美術の一流として発達し、8世紀のイコノクラスム(聖像破壊)の受難を経たのち、11世紀頃からのイコン敬拝の高まりとともに、ロシアやそのほかの東方正教会圏に広まっていった。正教会の信仰においてイコンは欠くことのできない存在で、聖堂内の聖障(イコノスタス)におかれる大形のものから、家庭内で拝する比較的小形のものがある。また、旅や移動の際に携帯した折り畳み式のイコンもある。このようなイコンの主題は、イエス、聖母、聖人、説話などで、画面に一つの主題が描かれたものから、複数の主題で構成されたものなどさまざまな形式がある。

玉川学園では、教育の理想として真・善・美・聖・健・富という絶対価値の追求を掲げて、調和ある人格の陶冶をめざす「全人教育」を実践し、学問・道徳・芸術教育とともに宗教教育を重視している。この宗教教育は、キリスト教精神に基づいてはいるが、一宗一派にとらわれることなく、神という絶対者を知り、神を敬愛する心を養うことを目的としてきた。

また、創立者である小原國芳は、児童・生徒・学生に対し、「本物を見よ」と常々言ってきた。この「本物」とは、「優れたもの」ないし「実物」という意味である。小原は、古今東西の優れた美術、音楽、演劇などを直接体験することにより、そこから得られた感動や経験を働かせて、自己の情操、創造性、判断力を豊かにすることを強調していた。それは、彼の提唱した「全人教育」の価値形成における一つの実践法でもあった。創立以来、小原は学習の補助・参考品となるような資料や教材・教具をはじめ、教育に関する資料などの実物資料を収集し、同時に芸術鑑賞教育を行っている。

このような背景をもとに、小原國芳の遺志を継いだ小原哲郎名誉総長の尽力によって創立50周年記念事業(1979年)の一環としてイコンの収集がはじめられ、現在では国内有数のコレクションを形成している。



1. 聖三位一体

ロシア / 16世紀

三位一体の主題は、神学的には父なる神に子なるイエスと聖霊とが^{きいつ}帰一(ひとつにまとまること)して、三者が一体であるという思想にもとづく(ヨハネ福音書10章、14章)。この図像表現は、旧約聖書のアブラハム(民族長、高貴な父)を訪れた神の使いに三位一体の神が象徴されているとする。「あなたはわたしのほかに、なにものをも神としてはならない」(出エジプト記20章3)という聖句が想起されている。アブラハムがマムレで天幕の入口に座っていると、3人が彼に向かって立っていた。彼は、「わが主よ、もし私があなたの前に恵みを得ているなら、どうぞしもべを通り過ぎさないでください」と言い、妻サラとともに食事を整えて饗応した(創世記18章)。この3人に対して「わが主よ」と単数で呼びかけているので、これら3人(三位)が一体であるという神学的解釈がなされ、この図像が成立している。この作品は、アンドレイ・ルブリョーフの「聖三位一体」(15世紀、モスクワ、トレチャコフ美術館)と共通の両面構成であり、「アブラハムの饗応」(14世紀末、アテネ、ペナーキ美術館)も同一の主題で、題名としては後者の方が望ましい。着ているものから、中央に座っている天使が神の子イエス・キリストであると判断することができる。三位一体(正教会では至聖三者ともいう)の教義を暗示するイコンである。

Old Testament Trinity

This icon depicts three angels who visited Abraham. The central Angel is a depiction of Christ.



2. 聖母マリヤの誕生

ロシア / 1810～50年頃

画面中央はマリヤ誕生の場面、上部左右はヨアキムとアンナへの受胎告知、右下は金門の出会い、左下にはヨアキムが玉座に座しているところが描かれている。中央上は父なる神で、本図の題辞として、教会スラブ語によって「至聖生神女(聖母)マリヤの誕生の図」が記されている。イコンの制作には厳しい神学的教理の規制があり、それらは今日まで、修道院や工房で師から弟子へと厳格に受けつがれている。イコン制作の手引書として有名なアトス山修道院の『聖像教本』によると、アンナの受胎告知の場面については次のようにある。「1軒の家、木のある庭、その中でアンナが祈っている。1人の天使がその上の方で彼女を祝福している」。アンナは月が満ちて9ヶ月目にお産をした。生まれた子が女の子であると産婆から聞いてアンナは「わたしの魂はこの日にたたえられました」と神に感謝し、身を清め、子に乳を与え、その子をマリヤと名づけた。本図は様式的にみて、中央ロシアにおいて1810年から50年に制作されたものと思われる。

Birth of the Virgin

This image shows the narrative of the Virgin's birth. It was produced between 1810 and 1850 in Russia.



3. イエス・キリストの神殿奉獻

ロシア／1800年頃

モーセ律法には「母の胎をはじめて開く男の子はみな、主に聖別された者と、となえられねばならない」(ルカ2章22～23)と記されている。聖母マリヤは身の潔めが過ぎたとき、ヨセフとともに幼な児イエスを連れてエルサレムに上った。神殿には、「主のつかわす救主に会うまでは死ぬことはない」と聖霊(正教会では聖神という)の示しを受けて宮に入ったシメオンが出迎え、幼な子を抱き、この幼な子こそ救主と、神を賛美して讃歌を唱える。そして母マリヤに「ごらんさい、この幼な子は、イスラエルの多くの人を倒れさせたり立ちあがらせたりするために、また反対を受けるしるしとして、定められています。そして、あなた自身もつらぎで胸を刺し貫かれるでしょう。それは多くの人の心にある思いが、現れるようになるためです」(ルカ2章28～35)と語る。マリヤのうしろには、犠牲としてささげる鳩一つがいを持ったヨセフが立ち、84歳になる女預言者アンナが「この子は天と地を創造した」と書いた巻物を掲げている。図像の表現形式は、イコン画に独特のものであり、ノヴゴロドで伝統的図例に従って制作されたものとみられる。キリストの神殿奉獻(救主迎接祭)は12大祭のひとつで、祭日は2月15日である。

Presentation in the Temple

This icon depicts the presentation of Jesus as a saviour in the temple.



4. イエス・キリストの洗礼

ギリシア／18世紀

バプテスマのヨハネが、ヨルダン川で人々に洗礼を授けていたとき、「イエスは、ガリラヤを出てヨルダン川に現れ、ヨハネのところに来て、バプテスマを受けようと言われた」。ヨハネは「わたしこそあなたからバプテスマを受けるはずなのに、あなたがわたしのところにおいでになるのですか」と、思いとどまるようにすすめるが、イエスは「今は受けさせてもらいたい」と、水の中に入っていかれた。「イエスはバプテスマを受けるとすぐ、水から上がられた。すると、見よ、天が開け、神の御霊がはどのように自分の上に向かってくるのを、ごらんになった」。また天から「これはわたしの愛する子、わたしの心にかなうものである」という声があった。このイコンは、画面上部に天国を表す光輪の一部が見え、そこから、イエスの頭上に光がさしている。また、聖霊の象徴である鳩がはばたき、イエス・キリストの足台の下には蛇が描かれている。父なる神は子なるイエスに「愛する子」と呼びかけ、聖霊は鳩の形で生命の到来を告知し、イエスの洗礼は三位一体の公現（奇跡的現象）であることを示している。イエス・キリストの洗礼（救主神現祭）は12大祭のひとつで、祝祭日は1月19日になっている。

Baptism of Christ

Christ is being baptized by John the Baptist.



5. マンディリオン(聖顔布)

ロシア / 1600年頃

肖像イコンは、キリストや聖母の原像が映し出されたもので、そのイコンを通じて信者は映し出されたものと交わるというのが東方教会の神学者たちの解釈である。したがって、それらの像は、人間の手で描かれたものではない(Acheiropoietos)イコンという伝説に遡源されている。「エデッサのアブガル王は、主の肖像を描かせるために、ひとりの画家をキリストのもとに派遣した。ところが、画家はキリストの燦然とした輝きのために、描くことができなかった。主は自ら、麻布(マンディリオン)に顔を押し付けアブガル王に送られた」(ダマスクスのヨハネ、正教のもっとも妥当な解釈)。ところが不思議なことに、その布にはキリストの顔が映し出されて残り、エディッサの王に送られた後にも多くの奇蹟を現したと伝えられている。手描きでないイコンのもうひとつに、中世にローマン・カトリック教会で説かれ始めた「ヴェロニカの聖汗布」(Veronika)がある。これはキリストが十字架を担いでゴルゴタの丘に向かう受難の途上の伝説によるもので、聖ヴェロニカが、引かれていくキリストの顔の汗を拭いたところ、そのハンカチにキリストの顔が映し出されたという聖汗布(ヴェロニカのキリスト像には荆冠がある)であるが、イコンの聖顔布と直接にはかかわりがない。画面は2人の天使が、キリストの顔の映し出されている聖布を掲げ持っているところで、真の聖画像であることを示している。キリストの顔のしわは、祝福の啓示あるいは苦しみを象徴したものとされている。聖顔布の聖像は城や街、聖堂内でも王門の真上などと、信者の出入りのあるところに掲げられている。本作品は、1600年頃ノヴゴロドの工房で描かれたものと考えられる。

Mandylicon

Two angels are holding a holy cloth printed with a portrait of Christ. The lines on Christ's face represent the revelation of blessing and suffering.



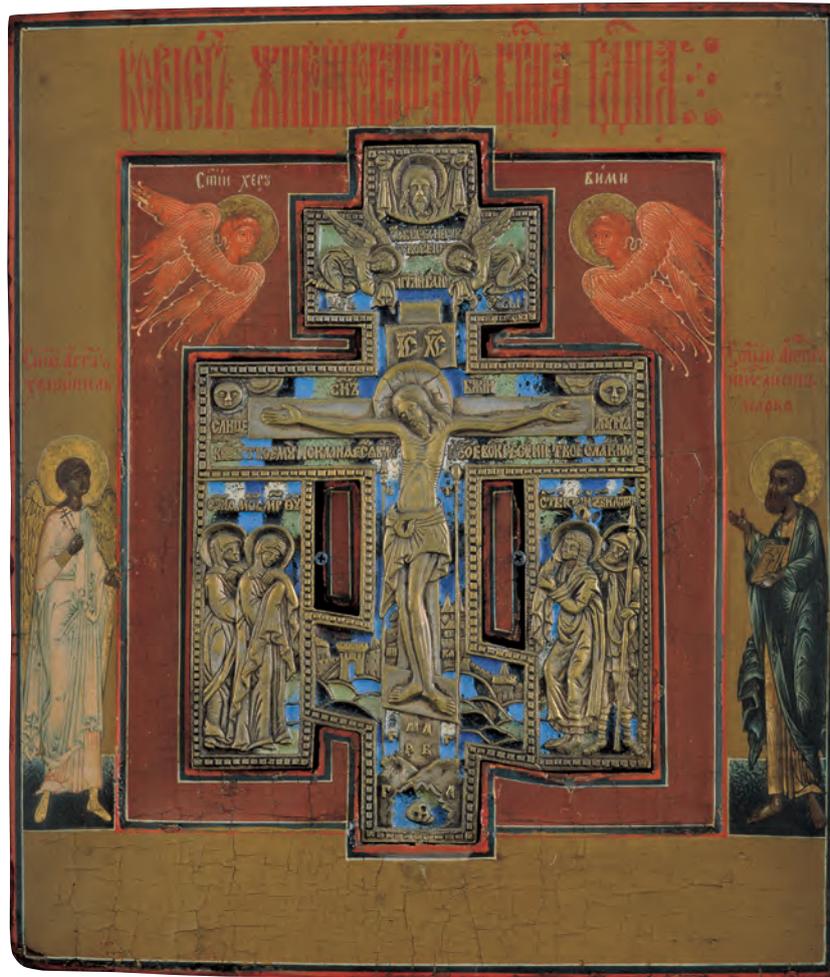
6. 怒りのキリスト

ロシア / 18世紀

コンスタンティヌス帝のミラノ勅令によって、313年にキリスト教が公認されると、聖地巡礼や聖遺物の敬拝熱が高まり、さらに聖像敬拝へと発展する。そのような過程においてキリストの図像は、聖顔布のキリストや全能のキリストにみられるような特定の形式に、教義的に固定されるようになる。ビザンティンのキリスト像の原型となったと言われるものに、外典の「レントゥルス偽書」がある。これは、ピラトの前任者のレントゥルスが皇帝ティベリウスに宛てて、イエスの外貌、人柄および活動について報告した文書とされ、中世以来広く流布して、種々のキリスト教像表現に大きな影響を与えたと言われている。キリストの図像を形式別に分けると、(1)聖顔布のキリスト(2)全能のキリスト(パントクラトル)(3)教師および福音の伝道者としてのキリスト(4)威厳のある顔つきをした世界審判者としてのキリスト(5)キリスト・エマヌエル(6)三位一体のキリスト(7)旧・新約聖書に取材した事蹟画などになる。この「怒りのキリスト」は上記(4)に属し、図柄はキリストの胸の辺りまでを描き、手は描かれない。この形式のものは「救世主」(Spas=救い)と言われ、顔だけの聖顔布や全身像または半身像のパントクラトルと区別される。「怒りのキリスト」は、図からもわかるように、厳しい怒りの顔というよりは、優しさ、恵み深さ、精神性の強さがあらわされている。

Christ in anger

"Christ in Anger" expresses tenderness, grace, and strength rather than anger.



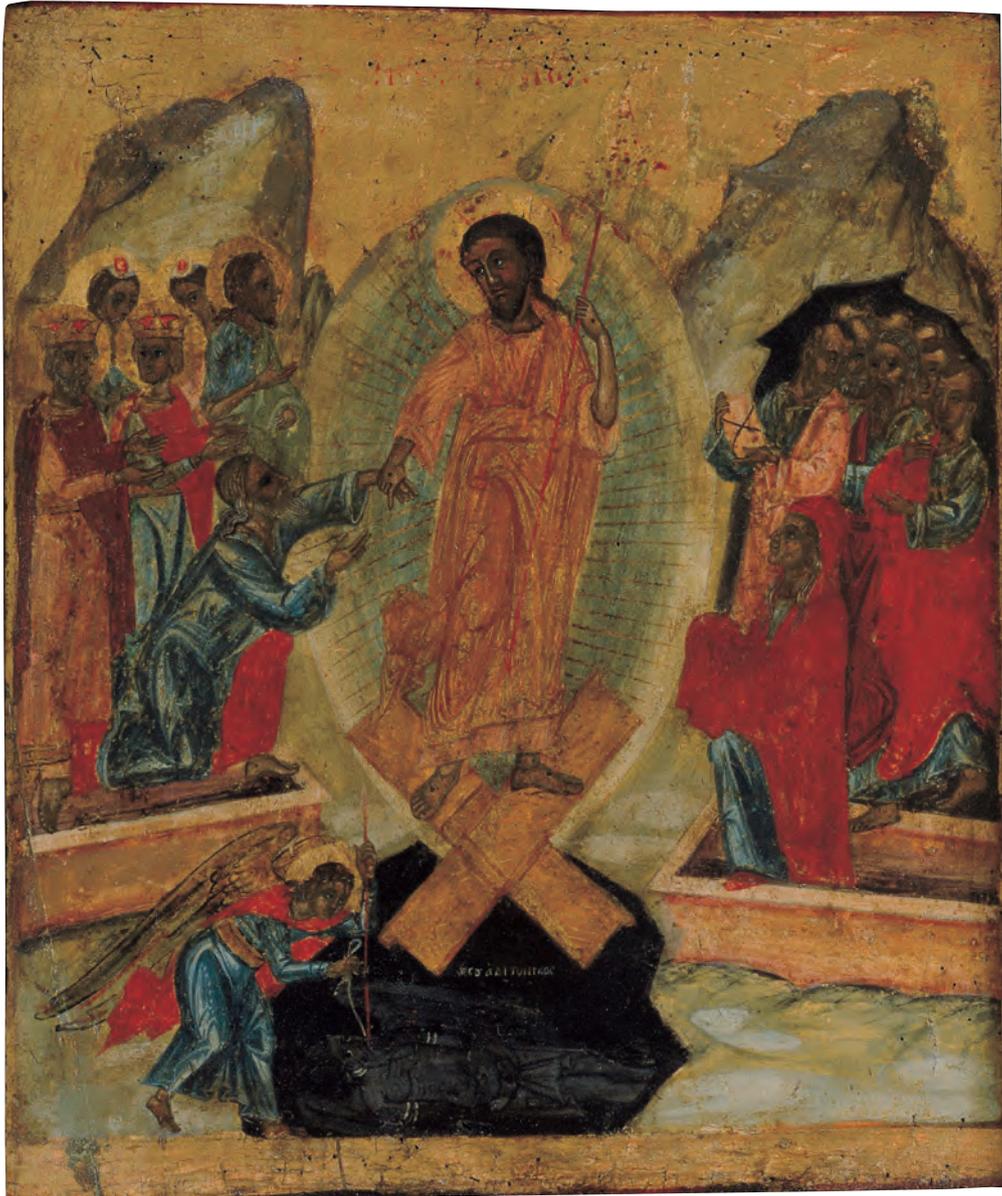
7. 十字架上のキリスト

ロシア / 18～19世紀

キリストの「十字架の道行き」は聖書の中のマタイ27章、マルコ15章、ルカ23章、ヨハネ19章をもとにして、中世末期ごろから描かれるようになった。正教会には「十字架の道行き」はないが、宗教美術の主題としては、死刑宣告から埋葬までを14場面に分けてあらわし、ローマン・カトリックの信者は聖堂に掲げられた各場面の前で十字架の道行きの祈りを唱える。すなわち、(1) イエス死刑の宣告を受ける(2) 十字架を背負う(3) 十字架の重みで初めに倒れる(4) 嘆きの聖母に出会う(5) クレネ人シモン、イエスの代わりに十字架をかつぐ(6) ヴェロニカ、イエスの顔を拭う(7) イエス再び倒れる(8) イエス、エルサレムの女たちを慰む(9) イエス三度倒れる(10) 衣をはがされる(11) 釘付けにされる(12) 十字架上で息絶える(13) 十字架より降ろされる(14) 墓に葬られるという場面である。この作品には、中心に、ブロンズ板にエマイユ(七宝)をほどこした十字架磔刑像がはめ込まれている。キリストの頭上にはマンディリオンと畏敬のため腕を覆っている2人の天使たちがあらわされ、十字架の横木の両端には太陽と月が、下横木にはエルサレムの市壁、足元にはアダム頭蓋骨があらわされている。また、左側には聖母マリヤとマグダラのマリヤ、右側には弟子ヨハネと百卒長ロンギヌスがあらわされている。板の部分は、テンペラで、上端左右に2人のセラフィムとケルビム、左に守護天使と右に聖マルコが描かれ、上縁には、教会スラブ語で「主の生命を与える十字架の高揚」と記されている。この板の部分は18世紀末に作られたものと推定され、中央の金属細工部分は19世紀に新しく作られた作品を、前のものに替えてはめ込まれたものとみられる。

Crucifixion

This crucifix is made of bronze and enamel.



8. キリストの復活(キリストの黄泉降り)

ギリシア / 17世紀

「わが救世主、人を愛する主よ、なんじは地獄に降り、全能者として、その門を破り、造成主として死者をおのれとともに復活せしめ、死のはりをください、アダムを詛より解き給えり。故にわれらみな呼ぶ、主よわれらを救い給え」(徹夜禱 コンダク 第五調)。イエスは十字架上で息絶えた後、黄泉に降りる。画面は、黄泉の門の扉を打ち砕き、扉を十字架状に積み重ねてその上に立ち、旧約時代の信者たちを連れ出そうとしているところである。神性をあらわすマンドゥラ(光背)に包まれたイエスが左手に十字架を持ち、右手でアダムの手首をつかんでいる。アダムの後ろには、ダヴィデ、ソロモン、バプテスマのヨハネ、2人の預言者と続き、イエスの右側で祈りながら立っているのはエバと旧約聖書にある敬虔な家長たちである。イエスの足元では天使が地獄の悪魔を槍で罰している。「キリストの黄泉降り」は、イコンの上縁部にギリシア語で「主の復活」と書かれているように、同一の意味を持っている。黄泉降りを強調する場合は、衣をひるがえしてアダムとエバの待つところに降ってくるように描かれる。復活のイコンは、あくまでもキリストの死と復活の意味を、福音書をもとにイメージ化(聖像化)したものである。

Resurrection of Christ

Christ is standing on a crucifix made of the door of Hades in a gesture of guiding Christians out to the next world.



9. ホディギトリアの聖母子

ギリシア / 1700年頃

聖母マリヤの原肖像には、パレスチナのリッドに、マリヤに捧げる聖堂が建てられたとき、そこにマリヤが訪れ、聖堂の柱にマリヤが生写されたという、いわゆる人間の手によらざる神母自成像(Theotokos Acheiropieton)と福音記者ルカが描いたマリヤ像があると伝えられている。ルカによって描かれたといわれる聖母子像は、ルカ伝のキリスト降誕を教義的な根拠として、ビザンティウム(コンスタンティノポリス)のホデゴス(Hodegos)聖堂に祭られ、聖堂の名にちなんで「ホディギトリアの聖母子」(Panagia Hodigitria)と呼ばれるようになったと言う。この像が多くの目の不自由な人を癒した奇蹟により、目の不自由な人の導者として敬拝を受け、また、ギリシア語のホデゲインに、道しるべする、道を示すなどの意味があることから「導く者」(正教会では導引女)と解され、旅人の守護者などとして広く尊敬を受けた。画像の表現形式としては、マリヤは立って(または半身像)、左腕で幼児(キリスト)を抱き、右手を上げて祝福し、左手に聖なる巻物を持つ構図となっている。このイコンには、聖母子の顔と手の部分に、後世の補修がみられる。光輪の部分の小さな穴は、金や銀の箔を張るためのアウトラインを示す跡である。

Virgin Hodigitria with Child

Hodigitria means "leader" in Greek. In connection to a story of the Virgin curing blind people, she is represented here as "the leader of the blind".



10. 聖母子(ホディギトリア型)

イタリア / 18世紀

このイコンは、ホディギトリア型の聖母子像で、画面を聖母子の顔と手、幼児(キリスト)の顔、手、足の部分を透かした金属板で覆っている。技法的には、真鍮(銀メッキ)の薄板にタガネを使用して文様を打ち出したもので、豊かな装飾性によって聖性を高める意図をもっている。テンペラ画の部分は、伝統的描法によらず、西欧の自然主義的絵画となっているが、両者の姿勢からイコンとして描かれたものと判断できる。なお、聖母子の頭部を覆っていたニムブス(光輪)の金具は脱落している。

Virgin Hodigitria with Child

The faces, hands, and feet of the Virgin and infant Christ are depicted in tempera, and the remainder is embossed on metal.



ペチェルスカヤの聖母(聖母マリヤ3連イコン)



11. 聖母マリヤ 3連イコン

ロシア / 18世紀

3枚のパネルを小さく3つ折りにたためるようにした3連イコン(Triptychon)で、聖職者や信者たちが聖地巡礼や旅行に際して携帯したものである。中央のイコンは、キエフの洞窟修道院によって名づけられた「ペチェルスカヤ(Pecerskaja)の聖母」で、聖母マリヤの左そばには、洞窟修道院を創立した聖アントニイ・ペチェルスキイと同修道院の2代目院長となったフェオドーシイ・ペチェルスキイ(右)が立っている。2人は洞窟を住処として清貧の中に祈り続け、ロシアの大地を光のように照らした聖父として、人々から特別の尊敬を受けたと言う。原形に「キエフ洞窟修道院の聖母」(13世紀、トレチャコフ美術館)があるが、形式的にはニコボイア型聖母、または玉座の聖母に属する図像である。左のイコンは「スュスカヤ(Sujskaja)の聖母」と呼ばれ、スヤ(ウラジミル)市によって名づけられたものである。形式的にはホディギトリア型に属する。右のイコンには「3本手(トリケルーサ)の聖母」が描かれている。

Virgin

Christians and priests carried triptyches during pilgrimages and journeys.



12. 聖母マリヤ・キリスト・授洗者ヨハネ 3枚折アイコン

ロシア / 1700年頃

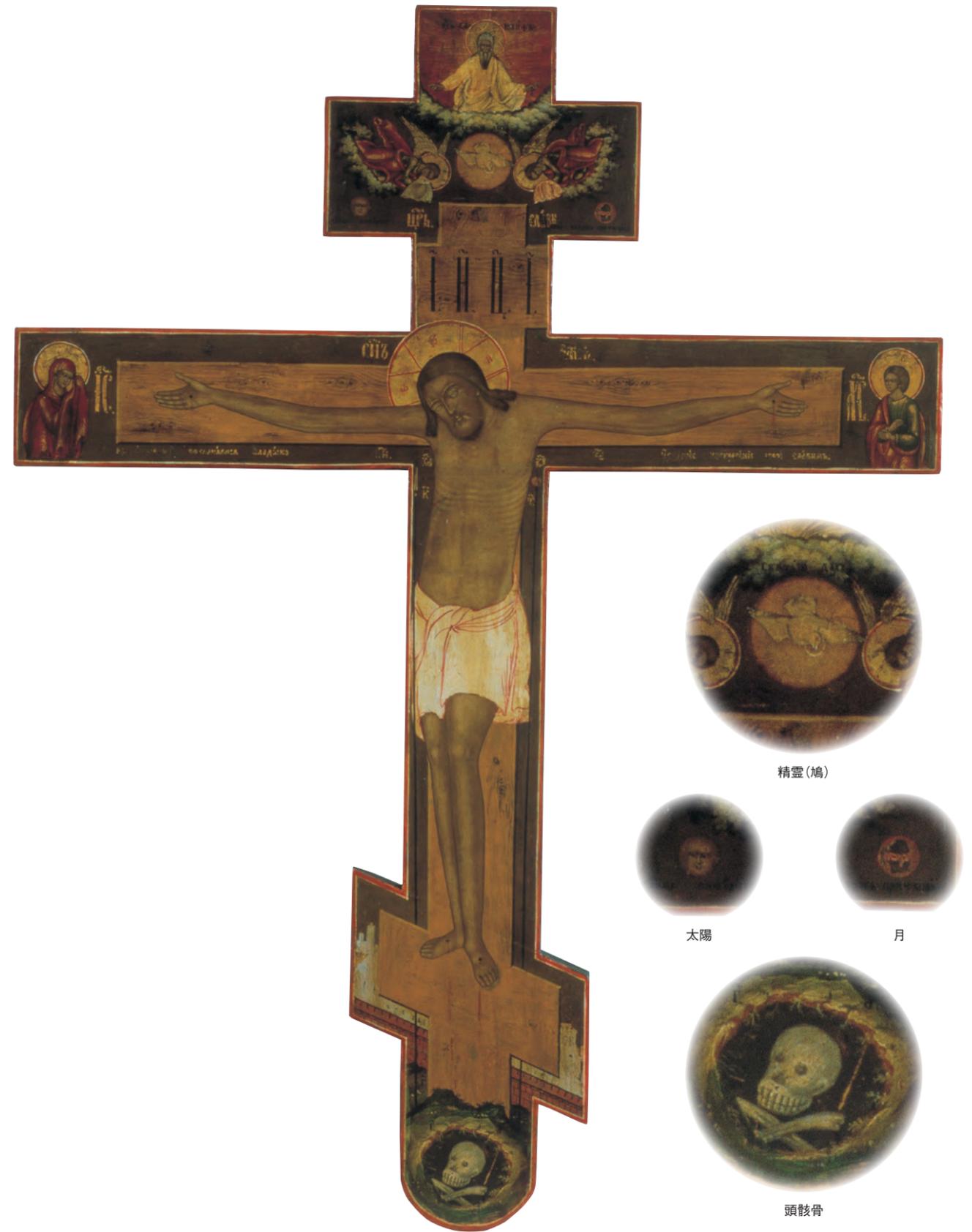
エマイユ(七宝)をほどこしたブロンズ製のメタル・アイコンである。中央は全能の神キリスト、左は聖母マリヤ、右は洗礼者ヨハネで、デエシス(全能の神としてのキリストに向かって祈願する形式)の形をとっている。たたみ込むと16.5×14.0cmほどの大きさになり、中央の全能の神キリストの上部には紐を通す穴のあいた突起がついている。旅行時の携帯用のアイコンで、実際に使われていたものであることから、ロシアの旅する人の祈りが想いおこされる。大自然のなかを旅する人の心細さが、このデエシスに向かって祈ることによって、天地創造の讃美に変わったであろうこともうかがえる。簡素ではあるものの伝統的なデエシスの基本形が守られている。

Virgin, Christ Pantokrator, St. John the Baptist

Russians carried this metal icon, and prayed for safe pilgrimages and journeys.



キリスト(聖母マリヤ・キリスト・授洗者ヨハネ3枚祈アイコン)

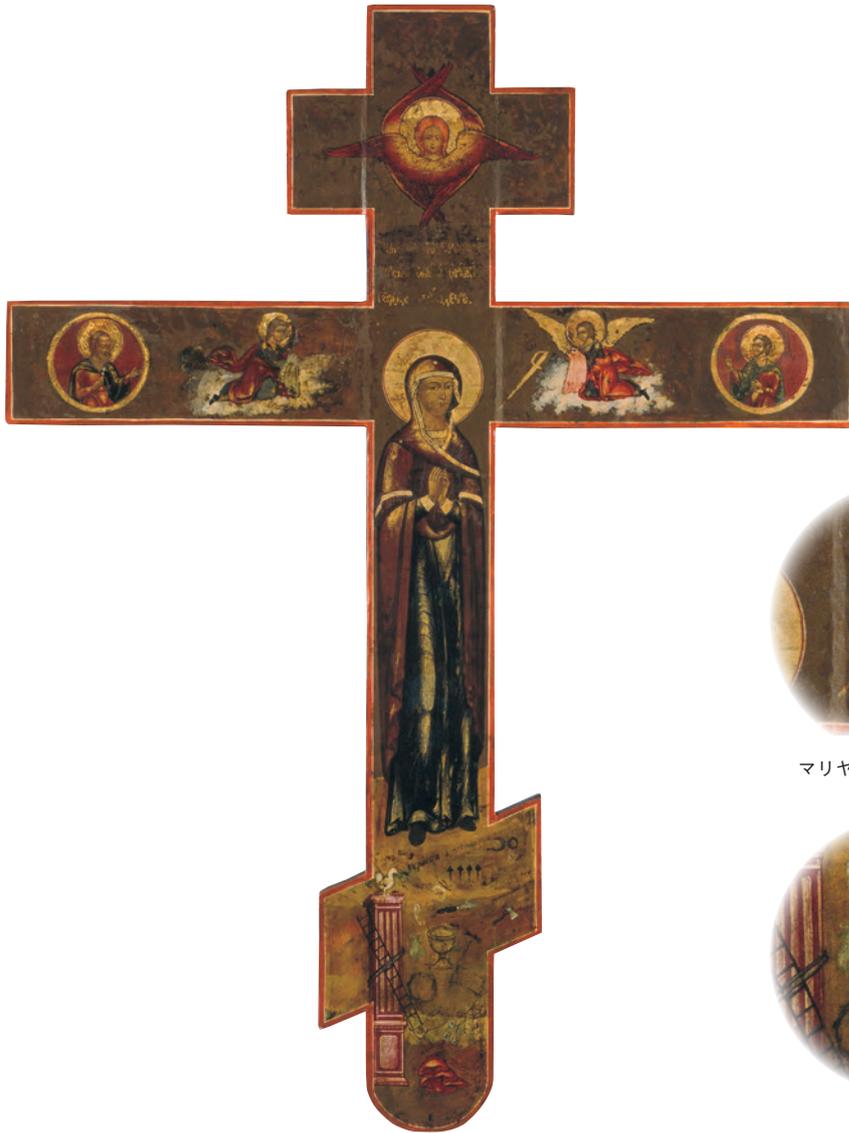


精霊(鳩)

太陽

月

頭骸骨



マリヤに向けられた鋭い剣



聖杯や金槌

13. 十字架イコン

ロシア / 1800年頃

ロシア式の十字架をかたどるイコンで、表にはイエス・キリストの磔刑像、裏には合掌してとりなしの祈りを捧げる聖母マリヤ像が描かれている。十字架イコンは、聖堂の奥中央に安置するために制作され、祝祭行進にも用いられるものである。表側のイエスの頭上には、父なる神と聖霊(鳩)、腕を覆った天使、太陽と月などが描かれ、聖三位一体をあらわしている。横木の両端の左に聖母マリヤ、右に福音記者ヨハネが描かれている。イエスの受難の場面にはいつも聖母マリヤと共にヨハネが登場するが、これはヨハネ福音書(19章25～27)に記されている次のような内容を含んでいる。イエスは十字架の上から母マリヤに弟子のヨハネのことを「これはあなたの子です」と言われ、それから弟子には「これはあなたの母です」と言われた。そのとき以来、この弟子はイエスの母を自分の家に引きとった。イエスの足下にはエルサレムの市壁とアダムの頭蓋骨が描かれている。イエスが十字架についたゴルゴタの丘は、ヘブル語で「されこうべ」という意味があり、死して白骨に化するアダムの死と死して復活をもたらしたイエスの十字架上の死の違いを明らかにしている。十字架の裏中央には祈りの聖母マリヤ像が描かれている。聖母マリヤの頭上には愛の天使セラヒム、足下には釘や金槌、滴る血を受ける聖杯、梯子、イエスがむち打ちされた柱など刑具類が雑然と描かれている。柱の上の鶏は、その鳴き声で悔い改めたペテロの事蹟(ルカ22章60～62)をあらわしているのであろう。横木には腕を覆った天使と聖者のメダリオンが描かれている。右側の天使の前には鋭い剣が聖母マリヤの胸を突き刺すように描かれているが、これは「イエス・キリストの神殿奉獻」の際のシメオンの預言「あなた自身もつぎで胸を刺し貫かれるでしょう」(ルカ2章35)を示している。

Crucifixion

An icon made in the shape of a Russian cross. The crucifixion of Christ is depicted on the obverse side and the praying Virgin is depicted on the reverse side.



14. 荘厳の聖母マリヤ(ティヒビンの聖母)

ロシア / 1800年頃

聖母像においては、衣装の表面に金色の刺繍があったり、また宝石をはめたり、金属細工で画面を覆うなど、しばしば装飾性の高い画像が作られてきた。聖母マリヤの額や肩のところにあらわされる十字架は、ときに「星」のように表されることがある。この星のしるしは、聖母マリヤの名前に由来し、聖母マリヤの象徴とされており、これをつけたマリヤは「星のマリヤ」とも呼ばれている。聖母の衣装を美しく飾るのは、「王の娘は殿のうちで栄を極め、こがねを織り込んだ衣を着飾っている、彼女は縫い取りした衣を着て王のもとに導かれ・・・」(詩篇45章13～14)を典拠として、神の母の尊厳と聖母信仰の情熱的な表現とされてきた。美しく飾ることを荘厳と言うが、荘厳の原義はただ飾ると言うだけでなく、飾ること即祈りである。祈ることを荘厳と言い、荘厳はまた慈悲の象徴ともされている。聖母像の成立の根本は、聖母マリヤに捧げる「れんとう連禱」にもあるように、代願者としてマリヤの助けを呼び求め、とりなしを祈る形像から生まれている。したがって荘厳のマリヤは、祈りとの直接的なつながりを重要視した画像と考えられる。この聖母像は、金地の上に、皮工芸のカービング技法に見られるような押し型で精緻な文様がつくり出されていて、金属の額のように聖母子像のまわりを覆い、聖母子のシルエットを美しく浮き立たせている。形式的にはホディグトリア型の聖母子像である。

Virgin Hodigitria with Child (Tichvin)

The stars on the shoulders and forehead represent the Virgin.



15. 三本手(トリケルーサ)の聖母

ロシア／1820～60年頃

聖母マリアの像には、その不思議な出現によって奇蹟を行ったという伝説によるものが多い。3本手の聖母については聖像論争の時代に迫害を受けたダマスクの聖ヨハネに起きた奇蹟の話からはじまる。聖像擁護に熱心であった聖ヨハネが迫害を受けて手を切られた時、聖母に祈って、治されたことを感謝して聖像に銀の手を献納したところから始まっていると言われている。3本手の聖母にまつわる話には、ほかにアトス山のヒランダール修道院が建立(13世紀)される時、聖母が第3の手で援助したというものがある。13世紀末頃にはスコピエやセルビアに3本手の聖母の名にちなむ教会が建てられ、この像の敬拝が不滅のものとなったという。聖母マリアは右手で幼児(キリスト)を抱き、左手で幼児を示している。形式的にはホディギトリア型であるが、左手の下方に、奇蹟を行った3本めの手が描かれている。これゆえに画面背景中央部の左右にわたり、教会スラブ語で「トロエルツツア(Troertschza)の聖なる神の母の像」と書かれている。枠縁の左には聖クセニア、右にはコンスタンティヌス帝の母ヘレナが描かれている。枠縁に主題と直接かわりがない聖人がよく描かれていたりするが、いずれもイコン制作を依頼した信者の守護聖人であったり、依頼したものが望んだ聖人である。

Virgin with Three Hands "Tricheiroussa" with Child

The idea of the Virgin's third hand originated from St. John's miracle wherein his wounded hand was cured by her.



16. 戴冠の聖母マリア

ロシア / 18世紀

グリュコフィルーサ(愛撫する聖母)に属する聖母像で、幼児(キリスト)は祝福のポーズをとらず、聖なる巻物も持たないで、聖母のマフォルティオン(マント)につかまっている。図像的に「戴冠の聖母マリア」は、マリヤの被昇天により、地上の存在から天上の存在への遷化して、天国の女王として戴冠するマリヤを指す。中世の中頃から、聖母マリヤの礼讃と信仰にともなうマリヤの神聖化によって、戴冠したいくつものタイプの聖母敬拝像が派生するに至った。しかしこれらは厳密に解釈すれば、天上における「マリヤの戴冠」と区別しなければならない。聖母子像では、一般にマリヤは青い着物に赤いマントをつけている。青は天の真実と貞節、赤は天の聖愛と信仰的情熱の象徴とされるところからも分かるように、色彩に関しても神学的結束のもとに描かれる。聖母マリヤのイコンには古くから、額と両肩の衣の上に輝く金の十字架が小さくほどこされるのが常である。十字架の凝ったものには、輝きの線などを多く加えて、星の輝きのようにしてあるものもある。この3つの十字架は、聖母マリヤがキリストを身ごもる前、身ごもっている間、身ごもった後に童貞女であったことを意味している。本図は、輝く金十字架に代わって童貞女の顔が入られている珍しいイコンである。

Coronation of the Virgin

The coronation of the Virgin symbolising Mary as the Queen of Heaven.



17. 聖母子(エレウーサ型)

ギリシア / 18世紀

聖母マリヤは幼児(キリスト)に頬を寄せ、幼児は聖母マリヤのマフォルティオンにつかまり、右手に来るべき運命(受難)を暗示する言葉が記された巻物を持っている。聖母はその手首を握り、わが胸にしっかりと抱きしめ、まなざしは幼児の悲嘆を憐んでいるかにみえる。形式的にはエレウーサ型に属する聖母像であるが、聖母の「七つの悲しみ」のひとつ「シメオンの預言」(ルカ2章)、すなわち幼児の運命を予見して悲しんでいる場面として、むしろ「哀しみの母」としての面が強調された聖母像となっている。画面の縁は、アンドレア型十字で区切って赤と青に描き分けられ、聖母のマフォルティオンのものと同様の細かい唐草文様の装飾がほどこされている。

Virgin Eleousa with Child

The lamenting Virgin is holding the infant Christ to her cheek. This gesture presages her sorrow over his future death on the Cross.



受難を暗示する巻物



18. 祝祭のイコン

ロシア／1800年頃

正教会の教会暦によるいくつかの祝祭をあらわす枠絵で構成されたイコンで、中央に復活祭をおき、これを12大祭の枠絵で囲んでいる。中央の上は「キリスト復活」、下は「キリストの黄泉降り」が描かれている。左下は地獄の人々で、そこから祖先の聖人たちが現れ出で、キリストはアダムの腕をつかんでいる。右下では疑うペテロが水の中に半分沈みかけている。右上は、熾天使セラフィムが門番をしている天国の門の前に悪漢が立ち、その左の手摺の後ろには天国にいる預言者エリヤの姿も見える。中央は復活者が墓から消えていくところである。その左では天使が地獄の門のところへ移り、上には空になった墓のそばで天使と香油を塗る人々が描かれ、斜め右上の墓のそばにペテロがいる。外側12図の枠絵は、上段左から「聖母マリヤの誕生」「聖母マリヤの神殿参詣」「受胎告知」「イエスの誕生」。2段目左「イエスの神殿奉献」右は「キリストの洗礼」。3段目左から「エルサレム入城」右は「キリストの変容」。下の段は、左から「キリストの昇天」「アブラハムの饗応」「マリヤの御眠り」「聖十字架挙栄」。四隅は福音記者たちで、上左はヨハネ、上右はマタイ、下左にマルコ、下右にルカが描かれている。

Festive Icon

This icon shows 12 festivals in the ecclesiastical calendar of the Orthodox Church. Easter set in the center, is surrounded by the 12 major festivals.

II



西南学院大学博物館所蔵イコン

西南学院大学博物館が所蔵するイコンは、フィリピンやエチオピアなどの国々で製作されたもので構成される。西洋からキリスト教がもたらされると、これがアジアやアフリカ圏にどのように受け入れられていったのか。同じ主題からその共通点や相違点を探り、非西欧圏におけるキリスト教の受容のあり方を紹介する。



西南学院大学イコンコレクションの概要

西南学院大学博物館では、11点のイコンを所蔵している。19世紀から20世紀のもので比較的新しく、フィリピンやルーマニアなどのもので構成される。

本学博物館は2005年5月に開館して以来、キリスト教に関する展覧会をおこなってきた。これにあわせて、国内外のキリスト教関係の資料を収集しており、日本はもとよりフィリピン、インド、エチオピア、メキシコ、中国など、非西欧圏のものが主である。本学で収集されているのは、イコンばかりでなく、ザビエル像や聖母マリア像、聖書類も含まれている。

本学が所蔵するイコンの多くはフィリピンのものである。フィリピンは、アジア唯一のキリスト教国(カトリック)で、1521年にスペイン国王に派遣されたマゼランが、ローマ・カトリックのミサを行なったことが起源である。その後、ミゲル・ロベス・レガスピらが到着した1565年以降に本格的な布教がおこなわれるようになる。

フィリピンには元来から自然霊や祖霊に対する信仰があった。キリスト教布教にあたっては、在来信仰を理解したうえで展開されている。死後世界・葬礼を司る祭司などの存在を、宗教祭礼などと接点にして利用していた。宗教画においては、宗教的感覚の基幹である恐怖心に訴えるような地獄の描写を多用している。

こうした概念で描かれたフィリピンのイコンは、ロシアなどの東方正教会との描写とは異なっている。イコンで描写される背景には、各国様々な歴史が混在している。本学が所蔵するルーマニアのイコンをみると、その歴史事情が反映されているさまは一見してあきらかである。イコンを通じて、各国の信仰のベースにあるもの、そして歴史背景も示されるのである。

なお、本展覧会で展示している資料は、2008年11月に行なわれた「境界は出会いの場 非西欧圏のキリスト教文化—西南学院大学博物館収蔵品展」で公開したものである。また、今回は、直接イコンとは関係のない聖像画もあわせて展示している。本展覧会を通じて各国での聖人のとらえ方の共通点や相違点を知っていただく機会になればと考えている。



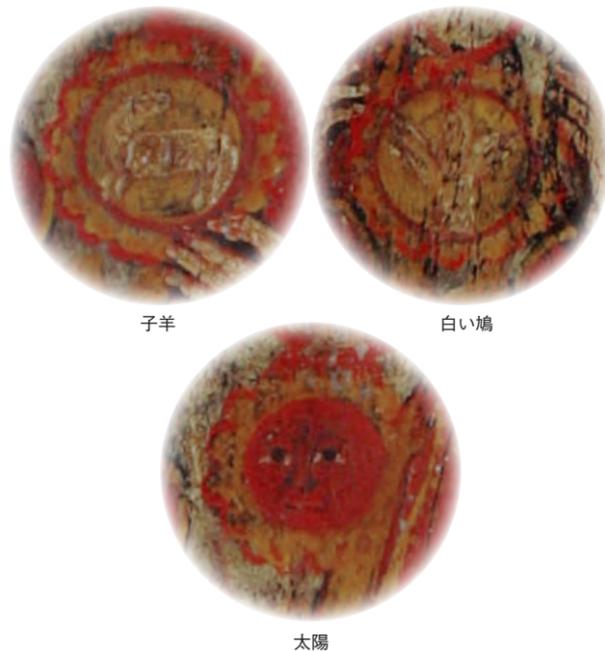
19. 三位一体

フィリピン／19世紀

三位一体とはキリスト教神学の根幹をなす教義で、父なる神と子なるキリストと聖霊が皆等しくて尊く、それら3つの位格(ペルソナ)が1つの実体・本質として完全に一致・交流することを意味する。17世紀、スペインの支配下にあったフィリピンやラテンアメリカで見られる「三位一体」の図像では、本資料のように同一の姿の3人の男性像で表されることが多く、中央には父なる神、左右に子なるキリストと聖霊があらわされる。この資料では、神が支配する全世界を意味する球体の上に、向かって左からキリスト、神、聖霊が雲のうえ並んでいる。同一の赤い衣をまとい、右手で祝福のポーズを示す三者であるが、キリストは手足に描かれた磔刑を表す釘痕の傷と胸元にある彼の象徴である犠牲の子羊によって判別できる、神は顔の描かれた太陽と左手に握る杓杖により、聖霊はその象徴である白い鳩によって見分けられる。

Old Testament Trinity

In the iconographic images of the "Trinity" produced in the Philippines and Latin America, which were ruled by Spain in the 17th century, the three angels are depicted in this manner in many works.



子羊

白い鳩

太陽



農民聖イシドロ



鋤をひく牛



天使



祈りを捧げる寄進者



地面から湧く水

20. 農民聖イシドロ

フィリピン / 19世紀

敬虔な信徒であったイシドロ(1070頃-1130)はスペインのマドリッド近郊で貧しい小作農の家に生まれる。畑仕事前におこなう朝の礼拝を欠かすことがなく、信仰心に篤い人物だった。ある時、イシドロが朝の礼拝のためにしばしば仕事に遅れてくると、仲間の小作農が地主に告げ口をする。そこで地主が調べるとイシドロが祈る間、天使が彼に代わって牛に鋤を引かせ、畑仕事を何倍もの速さで進めている奇蹟を目撃した。他にもイシドロは乾いた地面に杖を突いて水を湧かせるなどさまざまな奇蹟を起こしたため、農民とマドリッドの守護聖人とみなされ、フィリピンでも広く崇敬を集める聖人となった。ここでは中央に地面を杖でついて水を湧かせるイシドロと背後で牛に鋤をひかせる天使が描かれ、聖人の横には立膝で手を合わせる寄進者の姿が横向きで描かれている。なお、天使にも頭光が描かれていることがわかる。

Farmer St. Isidro

St. Isidro is well known as a pious Christian. This is one of the most popular images in the Philippines.



21. 聖母子・諸聖人・磔刑・冥府降下

エチオピア / 19世紀～20世紀

中央パネルには、母乳を飲む幼子イエスと彼を抱く聖母マリアが大きく描かれ、上部には顔に翼の生えた天使セラフィムが飛んでいる。右下に描かれるのは、聖母子を擁する寄進者の姿である。右パネル上部には「キリストの磔刑」が描かれ、処刑に関わる2人のローマ兵の下には聖母と福音書記者ヨハネが悲しみのポーズで描かれる。右上では、十字架に釘で打たれたキリストの手から流れる聖血を両側から天使が聖杯で受け止めている。右パネル下部には、エチオピアではキリストの復活を意味する図像の「冥府降下」が描かれる。暗い冥府で救世主の到来を待ち受けていたアダムとエヴァをはじめとして、旧

約時代の義人たちをキリストは連れ出し天上へと導く場面であるが、ここでは死に対する勝利を表す旗を手にしたキリストの足元に裸体のアダムとエヴァが描かれている。上部の「磔刑」場面における肉体の死に対して、キリストが打ち勝ったことを下部の「冥府降下」場面で示す組み合わせとなっている。左パネル上部には「竜を打ち負かす白馬に乗った聖ゲオルギオス」が描かれる。ゲオルギオスはエチオピアの守護聖人でもあり、単独で描かれることもしばしばあるが、信徒への絶対的な庇護者として聖母子との組み合わせで描かれることも多い。下部には「砂漠の聖ゲブラ・マンファス・ケッドゥス」が両手

を差し上げた祈りのポーズで描かれる。皮衣を着たこの聖人は、砂漠で孤独な隠修生活を続け、ライオンやヒョウといった肉食獣に平和を説き、渴きで飛べなくなった鳥に自らの目の涙を分け与えたというエピソードで知られる。エチオピアのキリスト教美術では、このように砂漠で厳しい隠修を行った修道士たちが聖人として崇敬を集め、しばしば描かれるのが特色である。

Virgin and Child, Saints, Crucifixion, Resurrection
A triptych made of wood and cloth.



聖母子



表



裏



騎馬聖人

22. 受胎告知とルーマニア十聖図

ルーマニア / 19世紀～20世紀

ルーマニアのガラスイコンは、農民が冬の農閑期に描くような民芸的な要素が強いものの、この資料は比較的手がよく、複雑な構図もこなしている。キリスト教の知識や教養を備えた職業画家の作品と思われる。記されている文字は、教会スラブ語を表す古い形のキリル文字であり、「聖なる」という意味を示す略記文字[C]も織り交ぜられている。本資料では、大天使ガブリエルが処女マリアに聖霊が下り、神の子を懐胎したことを告げる「受胎告知」を中心にすえている。上段左右には聖母と洗礼者ヨハネの組み合わせによって構成される「デイシス」の構図が、上段中央の「三位一体と聖母」の場面を挟んでいる。「デイシス」とは、ビザンティン美術においてキリストを中心に据え、向かって左に聖母、右にヨハネを配する図像の型を称する用語で、聖母はキリストの母、ヨハネはキリストの先駆者として、終末に際して人類の救済をキリストにとりなすとされる。聖母とヨハネは両手を胸に挙げて嘆願のポーズをとる。これは東方の正教美術の最重要な図像のひとつであり、さまざまなヴァリエーションがある。ここでは、三位一体として表される神に対して聖母とヨハネが嘆願するという構図である。中央の外側左右には、4名の正教会の祭服を身につけ、手に聖書を携えた人物が描かれる。全キリスト教会レベルではなく、地域性の強い聖人たちだと考えられる。左上の人物はその銘から「ペテロ(=現地名ペトル)」と読み、右下の人物は「ウェセックス王イネ」である。前者のペトルは、主教聖ペトル・モヴィラ(1596～1647)のことであり、彼はキエフおよび全ロシア府主教であった。後者の王イネ(在1596-没1647)は、領土拡張など権力者として成功を収めたが、戦いに疲れて最晩年は自ら退位し、妻とともにローマへ赴いて修道生活を送り、イギリス人巡礼者の救済施設などを作ったとされる。王でありながらも、聖人として生きた彼は、王冠をかぶらない姿で描かれている。他の2名は人物特定が難しい。

ルーマニアの中央北部にはトランシルヴァニアという地方がある。この地域には12世紀頃からドイツ人、特にザクセン系の人々が移住して、文化的にも宗教的にも比較的独自性を保っていた。このザクセン系移民は、アングロ・サクソンで、王イネとはもともと同じ出自の民族集団である。ウェセックス Wessex は、本来「西サクソン」 West Saxons という意味の古英語に由来するもので、トランシルヴァニアのザクセン系の人々には、自分たちと民族的アイデンティティを共有する近い存在だったと思われる。よって、本資料はトランシルヴァニアの伝統を受けているのではないかと推測される。本資料はさまざまな出自を持つ民族が混在する地域や時代に制作されたことを背景に、ルーマニア正教の伝統に基づきつつ、ローマ・カトリック側の権威を取り入れ、双方の支持を得ようとして正教とローマ・カトリックの中間的な表現を選択したと思われる。下段左右には、「竜を倒す聖ゲオルギオス」と「異教徒(イスラム教徒)を倒す聖ディミトリオス」という2人の正教美術で好まれる騎馬聖人が描かれる。両者とも悪を打ち破り、キリスト教を守護する戦士としての聖人であり、しばしば対で描かれる。オスマン・トルコの脅威を受け続けたルーマニアの歴史に裏付けられた聖人の選択である。下段中央には、キリスト教を最初に公認したコンスタンティヌス帝とその母ヘレナが描かれる。キリスト教の熱心な信徒であり、保護者であった母后ヘレナがパレスティナにて、キリストの磔刑に使われた十字架を発見したという「聖十字架伝」を表す図像である。

Annunciation and Rumanian Ten Holy Figures

Rumanian glass icons were usually made by farmers. However, this example was produced by a professional painter who had knowledge of Christianity.



蠟燭



冠



球体を手にしたイエス・キリスト

23. 聖母子

フィリピン / 19世紀

冠をかぶった聖母は右手に蠟燭を持ち、左手で幼子イエスを抱く。イエスは神が支配する全世界を意味する「球体」を手にしていることがわかる。全体が暗い背景なのは、暗黒の世の状態を表現している。そこに蠟燭を手にして光を照らす聖母子が、闇の中の人類に救いの光をもたらし、導くことを表現している。

Virgin and Child

Standing figure of the Virgin Mary with a crown on her head. She holds a candle in the right hand and the infant Christ in her left arm.



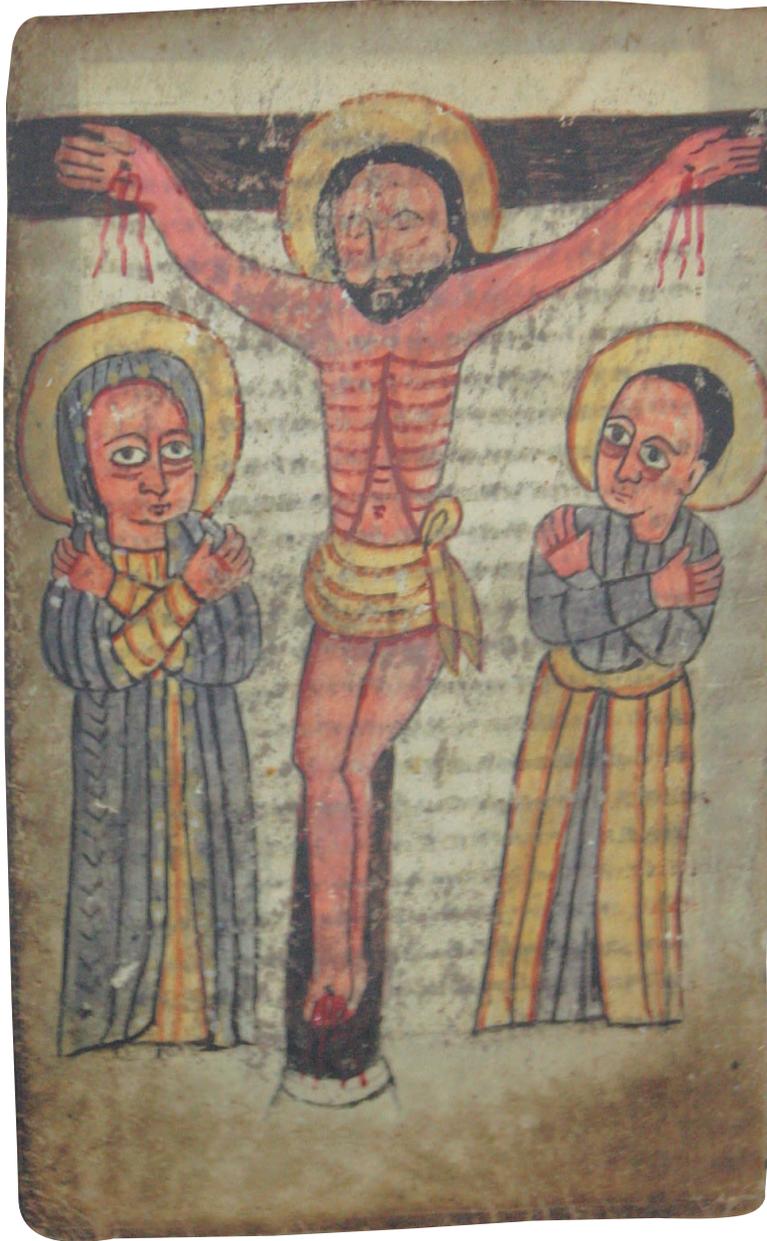
24. 救済の聖母子

フィリピン／19世紀

中央に幼子イエスを抱いた聖母が立ち、右手で炎に半身をのまれた男性の手を引いて救い出している。その聖母に2人の天使が冠を授けようとしている。さらに右下でもう一人の天使が聖母に捧げものを差し出している。この図の下には「救済の聖母」と記されていることから、顔の描かれた炎に象徴される煉獄にとらわれた信徒の魂を聖母が救済するという図像だとわかる。煉獄とは小罪のある、または罪の償いを果たさなかった靈魂が、天国に入る前に現世で犯した罪に応じた罰を受け、清められる場所とされる。生者はミサや祈りによって煉獄での魂の苦しみを和らげたり短くしたりすることが出来る。煉獄で苦しむ死者の魂を救うため、そして将来、死後の自分の魂を救ってもらうため、聖母にとりなしてもらえるように人々は自分が生きている間にできるだけ多く祈る努力を重ねるのである。本資料は「カルメル山の聖母」という、フィリピンには17世紀初めにもたらされた図像主題に基づいたヴァリエーションと考えられ、敬虔な信徒は煉獄の炎から聖母によって速やかに助けられることを表現している。聖母子はカルメル山、あるいはその山頂上の雲の上に立っており、炎の中の男性が首に巻いている緑色のマフラーのようなものは、スカブラリオといわれるもので、信心のために紐でつなぎ、肩から胸と背中にくるぶら下げ、聖画像を織り込んだ布である。

Redeeming Virgin and Child

The image of "The Virgin of Mt. Carmel" spread in the Philippines in the early-17th century. The Virgin and Child redeem a Christian from purgatory.



25. 磔刑

エチオピア / 19世紀

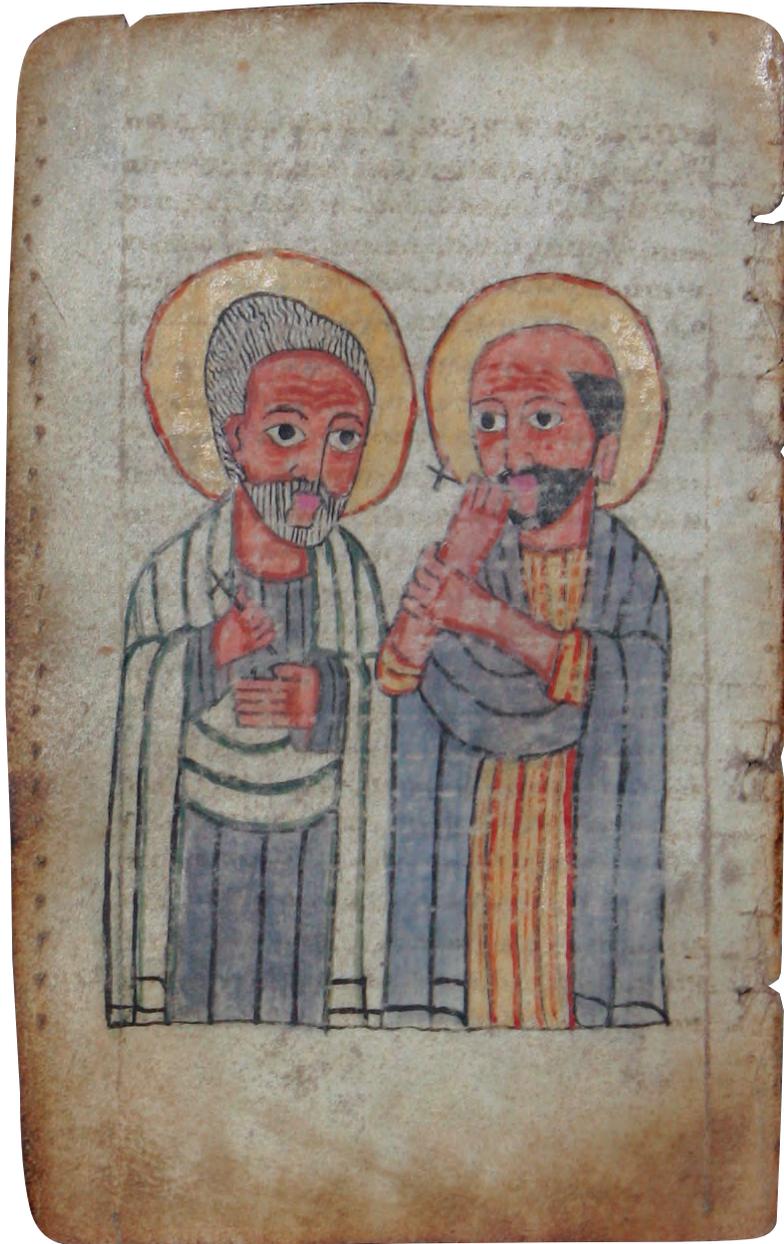
磔刑のキリストを中央に、向かって左に聖母マリア、右に福音書記者ヨハネが立っている。磔刑となったキリストの手足からは聖血が流れている。また、その両脇に立つマリアとヨハネは両腕を交差させた祈りのポーズをとっている。日本でもよく知られる国指定重要文化財「フランシスコ・ザビエル像」(神戸市立博物館蔵)と同じ格好をとっている。罪標は描かれていないものの、釘打たれたキリストの手足から流れる聖血を強調している。三者のそろった磔刑の図像には、ヨハネが気絶するマリアを支えるものもある。本資料は、本来聖書あるいは祈祷書の挿絵だった部位を切り抜いた断簡である。

Crucifixion

This picture of the crucifixion is an illustration from the Bible or a prayer book.



磔刑上のキリストの手



26. 聖ペテロと聖パウロ

エチオピア / 19世紀

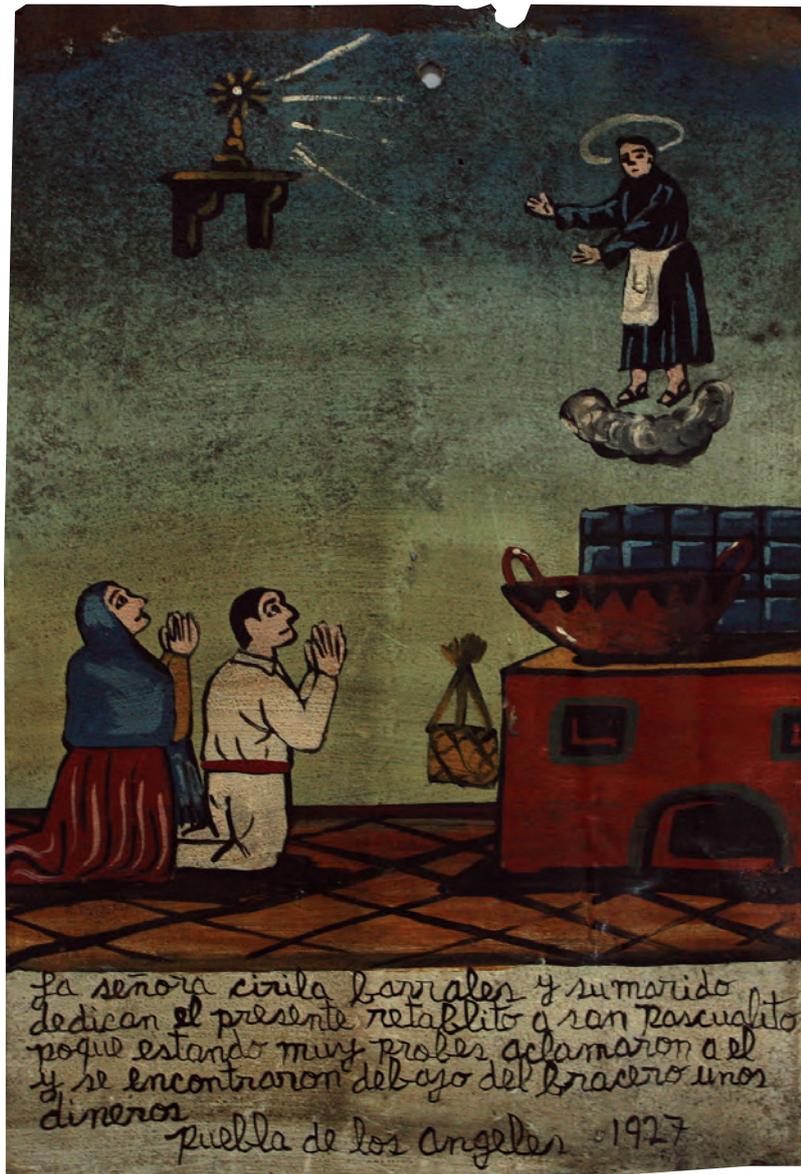
使徒の代表格であるペテロとパウロは、早くも4世紀には描き方の典型が確立していたが、ここでもそれを踏襲している。向かって左の白髪で白いひげの人物がペテロ、ひげや髪は黒いが頭頂部が禿げているのがパウロである。ペテロは12人の弟子のなかで常に指導的な役割を果たし、イエスも信頼していたともいわれる。パウロはイエスの直弟子ではなく、生前も出会っていないとされるが、キリスト教の歴史に多大な影響を与えた人物である。両者とも右手に十字架を握っている。本資料は、本来25の磔刑図と同じ聖書あるいは祈祷書に収められていた別葉の挿絵を切り抜いた断簡である。



ともに十字架を手にしている

St. Peter and St. Paul

St. Peter and St. Paul are representative apostles. They are depicted with the cross and nimbus. This painting is an illustration from the Bible or a prayer book.



27. 聖パスカリスへの奉納画

メキシコ／1927年

パスカリス(1540-1592)は、聖霊降臨祭の日曜日にスペインの小村に生まれた。その日はスペイン語で「聖霊のパスカ(復活祭)」と呼ばれ、このことに由来する命名である。両親は貧しい農民だったがとても信仰に篤く、パスカリスも羊飼いとして幼い頃から働き、清貧に徹し、日々の祈りを欠かさない信仰に篤い若者に育った。彼は羊を放牧中に何度も光り輝く聖体(キリストの肉を表すパン)を戴いた聖杯(キリストの血を表す葡萄酒の象徴)のヴィジョンを目にする奇蹟を体験し、やがてフランシスコ修道会に入会する。彼は夜も含めて長時間を聖体顕示台の前で過ごし、後に聖餐式の聖人とみなされた。貧者のためにひとかけらのパンを増やし全員を満たしたり、病人を治癒するなどの奇蹟を起こす。彼は料理と台所の守護聖人ももされる。新興のプロテスタントに対抗し、ローマ・カトリックが秘蹟や教会、修道会の意義や重要性を再確認する時期にあった当時、彼の存在はカトリックにとって理想的・模範的信徒の姿であり、1618年に彼は福者として認められ、1690年には聖人として列聖された。スペインの支配下にあったラテンアメリカでも崇敬を集めた聖人である。ここでは、台所のかまどの上に修道服を着てエプロンをつけた聖人が雲に乗って浮かんでおり、聖体顕示台を示している。下では寄進者の夫妻がひざまずいて聖人に祈っている。[奉獻文和訳大意]

敬虔なる婦人とその夫がこの祈禱画を聖パスカリスに奉納いたします。なぜなら聖人様のお陰で子宝に恵まれ、また、労働者として収入を得ることができるようになったからです。ロス・アンヘレスの町にて1927年

Dedicated Image to St. Paschalis

Paschalis was canonized as a saint in 1960 as a model Christian. This image shows the appearance of Paschalis as an apostle.

III

玉川大学教育博物館と 西南学院大学博物館の取り組み

玉川大学教育博物館と西南学院大学博物館は大学附属機関として、「社会へ開かれた大学」を具現化すべく様々な企画を実施している。特別展や企画展、公開講演会はもとより、刊行物出版や博物館実習の場としても利用されている。ここではこれまで行なわれてきた大学博物館の取り組みを紹介する。



玉川大学教育博物館の取り組み

玉川大学教育博物館 教授
柿崎 博孝

大学の沿革と博物館の概要

玉川大学は、1929(昭和4)年、創立者小原國芳(1887-1977)の「全人教育」を教育信条に掲げて開校した玉川学園を母体に、1947年旧制玉川大学として開学し、1949年に新制大学に移行した。現在玉川学園は、K-12(Kindergarten to 12th)、大学(文学部・農学部・工学部・経営学部・教育学部・芸術学部・リベラルアーツ学部)・大学院までの総合学園に発展し、幅広い教育活動を展開している。

当館の前身は、玉川学園創立当初から収集を続けてきた各種資料をもとにして、1969年大学図書館内に開設した「玉川学園教育博物資料室」にある。施設名称は「玉川学園教育博物資料館」(1983年度から)、「玉川学園教育博物館」(1986年度から)、「玉川大学教育博物館」(1996年度から)と改称されてきたが、1986年に中央ロビーの両翼にそれぞれ展示室と収蔵庫を備えた延べ床面積1380㎡の博物館として、現在の場所への移転開館が行われた。以後学園全体の附属施設としての位置づけから大学の附置機関へと移行し、さらに博物館相当施設の指定を受けるなど、博物館としての機能や活動はこの25年で充実するとともに、館の存在基盤や独自性も社会的に認識されてきている。



博物館外観

当館の役割は、大学附置機関として「全人教育」の理想具現のため、資料収集・調査研究・整理保存・展示・教育・関連事業等を実践し、博物館としての

機能をもとに教育および研究活動を行うことにある。そしてこれらの活動を通して学内の教職員・学生・生徒及び児童をはじめ、広く一般公衆の利用に供する使命も備えている。そのために、学内外の人々が何度も利用する魅力的で親しみのある施設づくりを心がけ、求心力と発信力をもった積極的で柔軟性のある活動の展開を行っている。あわせて歴史的・芸術的価値の高い資料を見せる「モノ」中心の展示を大切にしながら、人々の発見・創造・学び・交流の場として活動していくことを目指している。



展示室

所蔵資料

当館の所蔵資料は前述のように、玉川学園創立以来少しずつ収集してきた資料を基にしているが、1986年に「玉川学園教育博物館」と改められた頃から、それまでの所蔵資料を再整理し、博物館としての性格や特徴、またコレクションの特色や構造を考慮しながら、主として購入や寄贈による体系的な資料収集を行ってきた。現在整理済の所蔵資料は3万件を越えている。なお、コレクションの根幹を成す資料群には次のようなものがある。

◆教育史資料／近世教育思想家の筆蹟、肖像、編著書をはじめ、幕府の学問所、各地の藩校、郷校、私塾、寺子屋に関するもの、和漢籍、国書、往来物、洋学書、明治以降の教科書、教授書、掛図などを所蔵している。さらに、明治以降の教育行政資料や教育の現場で使われた教材・教具など、教育の具体的な姿や時代をあらわす資料を数多く収集している。

- ◆芸術資料／芸術の分野は主に美術資料を中心に収集を行い、そのほかに音楽、演劇資料からなる。美術資料では、西洋と日本を地域区分として、古代から現代までの絵画、彫刻、版画、工芸など約1400点を所蔵している。
- ◆考古資料・民俗資料／考古資料は玉川学園構内の遺跡や近郊の発掘調査資料、および各地で採集した資料から構成される。民俗資料は衣食住、生業、社会生活、芸能、儀礼などに関する道具、器具、造形物などの民具を所蔵している。
- ◆玉川学園史・小原國芳関連資料／校史に関する資料、文書、記録類をはじめ、学内刊行物や各種行事関連資料に至る学園関係資料を収集・保管している。創立者小原國芳関係資料は、小原家からの寄託資料と館独自で収集した資料からなる。
- ◆特別コレクション／館独自のコレクションとしてジョン・グールド鳥類図譜、A. シュヴァイツァー関係資料、音楽家コレクション(ガスパール・カサド・原智恵子関係資料、東敦子関係資料、石丸寛関係資料)などがある。

研究・教育活動

調査研究活動については、学芸担当の教職員が当館所蔵の資料について、あるいは当館の目的に沿う分野を中心に実施しており、その成果は展示という形で公開するほか、各種図録、報告書、著書、論文等の形で出版している。最近の活動には2009年度からの海外の大学博物館を中心とした調査がある。これは博物館教育の実践や学校カリキュラムとの連携のあり方を探ることを目的としたもので、これまで英国、韓国、オーストラリア、アメリカ合衆国において調査を行ってきた。

博物館の教育活動としては、玉川学園K-12の教育活動と連動して、博物館の資料を活用した数々の取り組みが行われている。大学との連携では、授業に関連した見学における解説や資料を活用した教育活動に協力しているほか、芸術学部および通信教育部が開講している学芸員資格課程における博物館学の講義科目や博物館実習に人的、物的な支援を実施している。一般の利用者を対象とした教育プログラムでは、企画展に合わせて講演会やギャラリートークを実施しているほか、見学者の求めに応じて実施する展示解説やレファレンス対応を積極的に提供している。



博物館実習「資料の展示と取扱」

展覧会などの実績

展示活動では、教育博物資料室時代から教育史に関する常設展示を基本として、随時一部資料の展示替えを行う形をとっている。また、常設展部門はある程度の年数が経過した段階で、大規模な展示のリニューアルを実施しながら所蔵資料を公開してきた。

企画展については、移転開館10周年にあたる1996年度以降毎年度企画展を実施することとして、コレクションや関連分野をもとにした展覧会を開催している。なお、主要な企画展は以下の通りである。

1987年度「折り紙展」・1996年度「江戸時代の学校—藩校」・1997年度「カサド生誕百周年記念祭」および「カサド関係資料特別展」・1998年度「玉川大学芸術学科教員作品展」「玉川学園の音楽教育をたどって」・1999年度「たかが虫・されど虫」「草莽の画家 片岡京二展」・2000年度「プリマドンナ 東敦子の世界」・2001年度「ジョン・グールドの世界—19世紀描かれた鳥類図譜」(ニューオータニ美術館と共催、同館を会場に開催)・2002年度「色彩の画家 海老原省象展」・2003年度「明治前期教育用絵図展」・2004年度「ルオーとイコン—描かれた聖像」(松下電工NAISミュージアム[現汐留ミュージアム]と共催、同館を会場に開催)・2006年度「掛図にみる教育の歴史」・2007年度「石丸寛 第九によせて」・2008年度「世界遺産巡礼の道をゆく【熊野古道】【カミーノ・デ・サンティアゴ】」「学びの風景—明治のおもちゃ絵と絵双六に描かれた教育」・2009年度「イコン—聖像画の世界」「長崎原爆展—未来へのメッセージ」・2010年度「現代能面・狂言面三人展」「鈴木コレクション おもちゃ絵の世界」・2011年度「資料で見る日本の子ども—遊び・子育て・幼稚園」(お茶の水女子大学附属図書館と共催)。



「イコン—聖像画の世界」展でのギャラリートーク

西南学院大学博物館の取り組み

西南学院大学 博物館学芸員
安高 啓明

大学の沿革と博物館の概要

西南学院は、1916(大正5)年に旧制男子中学校「私立西南学院」として開学されたことに始まる。その源流ともいうべき学校として、「福岡バプテスト神学校」(1907年)、「福岡バプテスト夜学校」(1911年)が開設されていた。

西南学院の創立者はC. K. ドージャーで、開学当

学部の計7学部からなる人文系大学となり、学生数も大学院生を含めると8,000人を超える。

1921年に完成した西南学院本館は、現存する学院最古の建造物である。2006(平成18)年5月13日に西南学院大学博物館(ドージャー記念館)として改築され、キリスト教関係資料をはじめ、学院史資料などを一般公開している。2004(平成16)年に福岡市指定有形



竣工当時の西南学院本館



開館当時の西南学院



定礎石

初の生徒は104人だった。この頃、福岡市大名町(現中央区赤坂)に校舎があった。1918(大正7)年、「中学西南学院」に改称、さらに早良郡(現在の福岡市早良区西新)に校舎を移転し、1921(大正10)年には「西南学院本館」が竣工する。

以降、この地が学院の拠点となり、キリスト教主義に基づく教育が行なわれている。創立者の遺訓「西南よ 基督に忠実なれ」は建学の精神として今日にも引き継がれている。第二次世界大戦中は、多々制約をうけるが、これを乗り越えた西南学院は、1954(昭和29)年にシンボルともいうべき「ランキン・チャペル」が竣工(2006年老朽化により取り壊し)、1969年には当時、西日本最大規模といわれた大学体育館が竣工されて、学内施設が充実していった。2009(平成21)年には環境にも配慮された大学総合グラウンド(田尻グリーンフィールド)が完成した。また、2010(平成22)年西南学院小学校が開設され、保育園・幼稚園から大学院までの一貫教育をおこなっている。

1949(昭和24)年、新制の西南学院大学は、学芸学部(神学・英文学・商学)を有して開設された。その後、学部が増設されて、現在では神学部、文学部、商学部、経済学部、法学部、人間科学部、国際文化

文化財となっており、西新地区を代表するランドマークとして多くの人に親しまれている。

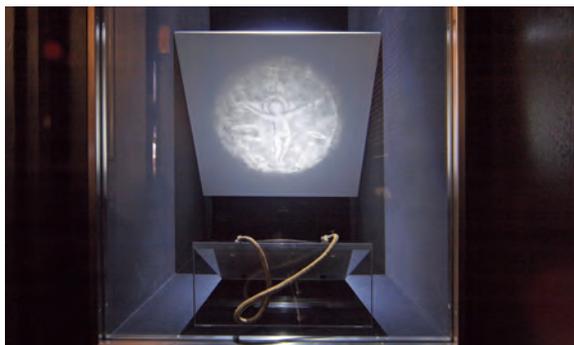
所蔵資料

本学博物館は、キリスト教の起源であるユダヤ教関係の資料から聖書考古学、イコン、日本キリスト教史に関する資料を所蔵している。また、西南学院の歴史をひもとく学院史資料もある。このなかからいくつか代表的な資料を紹介しておきたい。

クリシタン魔鏡は、クリシタン禁制下につくられたものである。一見すると普通の鏡であるが、光を投射すると、キリスト磔刑が浮かび上がる。まさに秘密裏で信仰を保持したクリシタンたちの心の拠り所となっていたのである。

このほか、島原藩の領民がクリシタンではないことを証明し、その所属する檀那寺などを記した「宗門改影踏帳」や、島原・天草の乱の様子を記した「原城紀事」全12巻、潜伏クリシタンたちが聖母マリアと観音を同一視して信仰していた「マリア観音像」、クリシタンを禁止する旨を書いて市中に掲げた「クリシタン制札」や「高札写」などがある。信仰形態をあらわす

ものに対して、これを取り締まる側の資料を所蔵し



「キリシタン魔鏡」投射図

ている。

ユダヤ教に関するものは、過越祭で使う皿や酒杯、トラーをさすヤドなどがある。また、常設展示室に聖書の変遷のコーナーがあり、聖書は複製を含めると世界各地のものがある。ユダヤ教に関する資料を有し、特別展も開催していることから、これまで数回、イスラエル大使が来館されている。

これら資料はさることながら、本館の建物そのものを貴重な資料と位置付けている。福岡市有形文化財であることは先に記したが、これを設計したのはW. M. ヴォーリズである。W. M. ヴォーリズは近江兄弟社の創設者としても知られるが、プロテスタント伝道者として、そして建築家として多くのキリスト教関連施設を手がけている人物である。

ヴォーリズはジョージアン・コロニアル・スタイルにより本学を設計し、簡素ながらも重厚感のあるものとなっている。本学博物館は当時の設計図や古写真をもとに復元している。講堂では往年の姿を彷彿



講堂

とさせ、三心アーチの講壇など、ヴォーリズ建築の結集を見出すことができる。

研究・教育活動

研究活動としては、展示にその成果を還元させるよう心がけている。年に2回おこなっている特別展では“九州のキリスト教シリーズ”を開催している。これに先だち九州各地に残るキリスト教関係資料の調査を継続的におこなっている。考古資料や文献資料、キリシタン文化史の調査を含め、総合的な研究をおこなっている。

大学博物館は、2010年3月に博物館相当施設に指定された。これを受けて、博物館実習の場として利用され、本学学生の指導にあたっている。学芸員としての基礎知識、その延長として実践能力を身につけることをテーマにカリキュラムを組んでいる。

2週間からなる実習では、前半期と後半期にわけて実施している。前半期では基礎実習として、資料台帳や調書の作成、カメラの使い方、資料の取り扱い、展示の仕方などを教えている。また、日本通運美術班の協力を得て、陶磁器や絵画などの美術品の梱包実習をおこなっている。また、企画展を実際に開催するための企画書や教育プログラムを作成した。

後半期では実践実習として、刊行物(博物館ニュース)の作成にあたり、実際にページ割から文章作成、業者との折衝、校正までの作業にあたらせた。そして、2週間の実習の成果として、実習生による企画展を開催している。初年度は「行こうよ！せいはいく」展、二年目は「西南生プロデュース！おすすめデートプラン@西新」、三年目は「西南大事“展”」を実施した。

初年度と二年目は海の中道マリンワールドの1階エントランスでおこない、学外の人に本学博物館の取り組みを広く知ってもらえる機会となった。3年目は本学博物館の特別展室で実施し、それまではパネルを中心とした企画展であったが、本学博物館所蔵資料を照明等に気を配りながら自ら展示して、学芸員として実践力を養う機会とした。

2011年度から3ヶ年、大学博物館が取り組み主体となった「大学博物館における高度専門学芸員養成事業―日中韓における大学博物館の機能と大学院生就業支援」が学内GPに採択された。大学博物館を有する大学の強みとして、中長期的に学生を直接指導することができる点がある。その指導方法の策定と他大学の大学博物館の取り組みを調査するものである。大学博物館としての責務



第3回実習生企画展「西南大事“展”」会場風景



実習の様子

でもある文化財の継承とその担い手を養成するために、どのような指導が可能か、国内外の大学博物館を3年間にわたり調査していく。

特別展開催にあわせて、学内、一般を対象に特別展に関連した公開講演会を実施している。あわせてギャラリートークも実施している。そして、小学生を対象とした「せいなんこどもワークショップ」をおこない、大学博物館への門戸を開いている。展覧会図録や季刊で博物館ニュース、年に1回年報を刊行し、記録に残る形で旬な情報や成果を発信している。

展覧会活動

博物館の基幹業務である展覧会事業として、大学博物館では、年に二回の特別展と三回の企画展を開催している。特別展に関しては、キリスト教に関する展覧会が主であるが、ユダヤ教の美術工芸品(ジュダイカ)に関するもの、W. M. ヴォーリズに関するものもおこなっている。下記の表がこれまで本学博物館で開催された特別展の一覧である。

特別展一覧

特別展	会 期	来館者数
納戸の奥のキリシタン	2007年5月14日～6月30日	3326人
ジュダイカコレクションI 祈りの継承 — ユダヤの信仰と祭 —	2007年10月29日～ 2008年1月19日	3026人
使命としての建築 — ウィリアム・メル・ヴォーリズと西南学院 —	2008年5月12日～7月5日	2760人
境界は出会いの場 非西欧圏のキリスト教文化 — 西南学院大学博物館新収蔵品展 九州のキリスト教シリーズI 信仰とその証 — 島原・天草の乱と天草四郎 —	2008年10月27日～12月13日	2361人
2009年6月20日～7月31日	3871人	
ジュダイカコレクションII 祈りの継承 — ユダヤの生活と儀礼 —	2009年11月10日～ 2010年1月16日	3121人
九州のキリスト教シリーズII 南蛮の鼓動 — 大分に残るキリシタン文化 —	2010年5月27日～7月3日	2318人
開館5周年記念特別展 海を渡ったキリスト教 — 東西信仰の諸相 —	2010年11月2日～12月11日	2947人
九州のキリスト教シリーズIII 海流に魅せられた島 天草 — 祈りの原点とキリシタン文化 大学博物館共同企画シリーズI イコン — 東西聖像画の世界 —	2011年6月8日～7月18日	2641人
2011年11月2日～12月10日	—	

九州のキリスト教シリーズはこれまで、島原・大分・天草と3回おこなっているが、それに先駆けて、平戸市生月町のかくれキリシタンの展覧会を開催している。本学はキリスト教主義の大学であることから、九州のキリスト教文化圏の調査は使命でもある。また、総合的な調査研究をするにあたっての先駆的かつ長期的に継続可能なテーマであり、福岡に立地する大学故に発信力をもって本シリーズを展開できると見込み、精力的に行っている。

また、ジュダイカ・コレクション展は本学名誉教授のご協力を受けて、2回開催するに至る。大学には多くの研究者であり教育者がいる。一人ひとりが得ている情報を共有するとともに集約する拠点が大学博物館であり、これを社会にわかりやすく還元するのが大学博物館の役割である。同様の特別展は以後も必要となってくるだろう。

今後の展開としては、これまで2度、船の科学館・海と船の博物館ネットワークから助成金を得ている



「海を渡ったキリスト教」展会場



特別展開講講演会・シンポジウム

が、今後も外部資金を獲得し、より質の高い展覧会を実施していかなければならない。また、本展覧会の“大学博物館共同企画シリーズ”を継続的におこない、大学・地域の垣根を越えた大学博物館同士の連携と協力を視野に入れている。展覧会を通じて、広く社会還元、情報発信するとともに、調査・研究などの質的向上を目指していく。

現在、春季と秋季特別展以外の日に、企画展を開催している。ひとつの資料を掘り下げて紹介するもので、パネル12枚を使って1階廊下から2階講堂入口まで展示している。これまで①「世界人物図巻の世界」(2010年2月4日～5月22日)②「シーボルト著「日本」にみる近世N I P P O N」(2010年7月15日～10月22日)③「蒙古襲来絵詞と元寇防塁」(2010年12月21日～2011年5月16日)④「シーボルト著「日本」にみる近世N I P P O N—一年中行事—」(2011年7月15日～10月25日)を行なっている。特別展とは異なる性格のこれらの企画展は、来館者の知的好奇心の開拓と来館者サービスへとつながっている。結果として、博物館活動そのものの向上へとつながっている。

おわりに

大学博物館の設立目的は、“社会に開かれた大学”を実現すべく、その地域社会との接点としての役割や学術情報の発信にある。また、教育機関である以上、人材育成にもあたる必要があり、次世代の文化財行政、学芸員として必要な素養を身につけさせる機関でもある。大学の使命や社会からの要請を見極めながら、大学博物館を運営していかなければならない。大学の精神の拠り所、文化継承や教育・研究の拠点として、今後も着実な歩みを続けていくつもりである。

イコンの製作過程と意義

玉川大学教育博物館 教授
柿崎 博孝

本展覧会でも出品しているイコンの説明をしておきたい。10世紀末、キエフを中心に栄えていたロシアに、正教会の布教とともにイコンがもたらされた。すぐれた聖像表現は一般的な文化や技術の伝播と同様、初期においてはビザンティン帝国からのイコン自体の請来からはじまったと考えられる。その後帝国の聖像画家から画法が伝えられ、さらに聖堂が各地に建てられると聖像画家も招聘され、やがてロシア人の聖像画家も誕生していった。こうしてイコンは正教信仰とともに、ビザンティン美術の栄光を受け継ぎ、ロシア中世美術の精華といわれる存在になった。

正教会の聖堂は入り口から奥に向かって啓蒙所(前堂)、聖所(中堂)、至聖所(祭壇)に区分される。聖堂を訪れると、壁画像や聖像安置台に並べられた聖像を目にするが、ひときわ目をひくのが奥の至聖所と聖堂中央の聖所部分を仕切るイコノスタス(イコノスタシス)と呼ばれる聖障である。イコノスタスはビザンティン聖堂建築においてみられるもので、一般的に構造材は木製で、イコンが何段にも嵌め込まれている。下部には3つの扉(王門、南門、北門)が付き(規模の小さな所では王門だけの場合もある)、ロシアでは多い場合イコンが5段や7段に嵌め込まれている。信者席から見ると、中央の王門上のデエシスを中心に、左右に聖母、洗礼者ヨハネ、天使、聖人たち、上下にも教会祝祭、キリスト、マリア、聖人、預言者、聖堂寄進を祝うイコンなどで構成されていることが多い。

イコノスタスは、聖堂の奥に通じるアーチの上にイコンを掲げたのが起源であるとされるが、聖堂建築からすると単に内部の仕切り壁ではないのが興味深い。正教会の聖堂は東向きに建てられており、必然的に信者は東に向けて祈るようになる。これはキリストが世の光であり、日がいずる東方に向かって祈ることで、神と接することを意味している。したがって、イコノスタスは人びとの信仰を支え、神の国と向き合う神聖さや精神性をいざなう働きを有しているともいえる。

一方中世以来信者の家にはイコンが複数存在し、

人びとの生活と密接に結びついていた。子どもが生まれるとその名前を聖者たち名前の中からつけ、その聖者の子の守護聖人とした。また職業によって、大工・船大工・海運業者はニコライ、鍛冶屋・金銀細工・皮革職人はコジマとデミヤンというように守護聖人が決まっているなど、中世以来名や職業の守護聖人のイコンをもつことも多かった。同時に先祖伝来のイコンや嫁入りの際に携えてきたイコンなどもあり、各人、各家庭のイコンは信仰と同時にさまざまな因縁によっても結ばれていたのである。

そうした家々の祈りの場は東に面した部屋の右隅(ロシア風にいえばクラスヌイ・ウーゼル=赤い隅)で、そこにイコンを安置した。イコンの前には燈明があげられ、旅に出る際は折りたたみ式のものが携帯されたように、人びとは祈りを通してイコンとの深いかかわりをもっていたのである。

イコンは原則として専門の修道士によって描かれる。修道士は制作に入る前に、祈りと断食の生活を過ごして心身を浄化し、使用する材料・道具をも清める。そうした準備期間を経て、天界の聖なる原像を表すために自身の個性をおさえ、テーマの霊性に近づく努力をしながら制作を行った。構図や色彩などの画像表現には教義による厳しい規則があり、その伝統は基本的に今日まで受け継がれているが、描かれた時代や地域によって様式的には違いがみられる。

画面の表現には、西欧の絵画における遠近法とは違った図法が用いられている。たとえば、いくつかの線が水平線上の消失点に集まる遠近法とは逆に、消失点が画面をみる人側に集まる遠近法(逆遠近法)、まっすぐな線や面を彎曲するように描いた遠近法(彎曲水平線遠近法)、画面の中にいくつかの視点を組み入れたものなどである。これにより、描かれた聖像、建物、家具、風景などは時間、空間、重力などといった地上の法則から解放されているかのような感じを受ける。

基底材(支持体)としての木材には地域的な違いがあるとしても、一般的にボダイジュ、カシ、イトスギ、ブナ、シラカバ、ポプラなどが選ばれ、長い期間乾燥させたものが使用される。中には大型のイコンの

ように複数の板を横接ぎにして、膠で貼り合わせたものも使用されている。また木材は有機質であるため、湿度の変化による変形(反り)や時間の経過による歪みを防ぐ目的で裏側に2本の横棧を入れているケースが多い。さらに周囲を枠取りし、画面となるその内側を低くしたアイコンも多くみられる。これは画面を低くすることで、天上界と地上界との間の窓となる意味合いをもっているといわれる。

絵はテンペラ技法によって描かれている。テンペラ(tempera)とは、適度な割合で混ぜるというラテン語のテンペラーレ(temperare)に由来する言葉で、顔料と固着剤を混ぜ合わせる際、その固着剤をテンペラと称したのが語源となっている。絵具の固着剤には卵、膠、樹脂、油、アラビアゴムなどが用いられるが、古くはテンペラというところのあらゆる固着剤を意味していた。それが15世紀以降の油彩画の普及にともない、語意の範囲がせばめられた結果、一般的には卵の黄身を固着剤にして、水、顔料を混ぜて絵具にしたもののみをさすようになったのである。その特徴は塗られた色面がとてもなめらかで、光沢があり、定着性、乾燥性にも優れていることや、他の技法に比べて素材自体がかなり長い間安定した状態(劣化のスピードが遅い)にあることがあげられる。

アイコンの制作は次のような過程を経て行われる。

- (1)板の四方から数センチほど枠を残して、内側を数ミリ削り取って低くする(低くした部分は平面になるように削る)。
- (2)板の表面に膠を塗り(前膠)、乾燥させる。その後膠を混ぜた石膏を重ね塗りする。
- (3)麻布を張る(麻布を貼らない場合もある)。
- (4)雪花石膏(アラバスター)で地塗りをする。最後のほうの重ね塗りは石膏の濃度を薄くして、なめらかに仕上げる。石膏を塗った面を乾燥後に鉄製のヘラなどでさらになめらかにする。
- (5)線描き用のメノウ棒で下図の線を刻み込む(あるいは下図の紙を画面にのせ、突き錐などで点線状にアウトラインをつける)。
- (6)テンペラ(卵の黄身、水と顔料を混ぜた絵具)で背景地を塗る(金箔・銀箔を使用する場合は、テンペラを塗る前に貼る)。
- (7)線に沿って色を塗る(一般的には寒色系の暗い色から中間色、暖色系の明るいトーン、ハイライトと仕上げていく)。
- (8)画面が乾いてから油ワニス塗布する。

このようにしてつくられたアイコンは美術館でも鑑賞することもできる。ロシアではトレチャコフ美術館、エルミタージュ美術館、ロシア美術館、その他地方の美術館などが優れたアイコンを収蔵し、展示している。ただし、美術館では「コレクション=移動されたもの」という美術館の機能性による問題が横たわる。つまり、美術館の収集品は本来あった場所から移されて、さまざまな道をたどりながら美術館に行きついたのである。また今日にまで伝え、守られて

きたアイコンは幸運ともいえ、時代時代でさまざまな迫害や災禍をくぐり抜けてきたものが多い。中には破壊・破棄されて消え去ったアイコンも相当数ある。したがって、私たちが幸いにも出会えたアイコンそれぞれには、人びとの想い、願い、祈り、聖像追究の歴史、経てきた時間などが見えないながらも必ず存在しているのである。

■アイコンー東西聖像画の世界展出品目録

	作品名	英 訳	時 代	製作国	法 量	所蔵先
1	聖三位一体	Old Testament Trinity	16世紀	ロ シ ア	33.0×28.2cm	玉川大学教育博物館
2	聖母マリヤの誕生	Birth of the Virgin	1810～50年頃	ロ シ ア	30.7×26.3cm	玉川大学教育博物館
3	イエス・キリストの 神殿奉獻	Presentation in the Temple	1800年頃	ロ シ ア	31.1×26.1cm	玉川大学教育博物館
4	イエス・キリストの洗礼	Baptism of Christ	18世紀	ギリシア	41.4×27.3cm	玉川大学教育博物館
5	マンディリオン(聖顔布)	Mandyllion	1600年頃	ロ シ ア	32.0×27.0cm	玉川大学教育博物館
6	怒りのキリスト	Christ in anger	18世紀	ロ シ ア	35.6×28.0cm	玉川大学教育博物館
7	十字架上のキリスト	Crucifixion	18～19世紀	ロ シ ア	33.1×26.7cm	玉川大学教育博物館
8	キリストの復活 (キリストの黄泉降り)	Resurrection of Christ	17世紀	ギリシア	41.3×35.0cm	玉川大学教育博物館
9	ホディギトリアの聖母子	Virgin Hodigitria with Child	1700年頃	ギリシア	34.0×22.6cm	玉川大学教育博物館
10	聖母子 (ホディギトリア型)	Virgin Hodigitria with Child	18世紀	イ タ リ ア	27.0×22.0cm	玉川大学教育博物館
11	聖母マリヤ 3連アイコン	Virgin	18世紀	ロ シ ア	18.4×46.0cm	玉川大学教育博物館
12	聖母マリヤ・キリスト・ 授洗者ヨハネ 3枚折アイコン	Virgin, Christ Pantokrator, St. John the Baptist	1700年頃	ロ シ ア	16.5×42.0cm	玉川大学教育博物館
13	十字架アイコン	Crucifixion	1800年頃	ロ シ ア	117.0×87.5cm	玉川大学教育博物館
14	荘厳の聖母マリヤ (ティヒビンの聖母)	Virgin Hodigitria with Child (Tichvin)	1800年頃	ロ シ ア	31.0×26.5cm	玉川大学教育博物館
15	三本手 (トリケルーサ)の聖母	Virgin with Three Hands "Tricheiroussa" with Child	1820～60年頃	ロ シ ア	35.2×30.8cm	玉川大学教育博物館
16	戴冠の聖母マリア	Coronation of the Virgin	18世紀	ロ シ ア	31.5×26.5cm	玉川大学教育博物館
17	聖母子(エレウーサ型)	Virgin Eleousa with Child	18世紀	ギリシア	35.2×28.0cm	玉川大学教育博物館
18	祝祭のアイコン	Festive Icon	1800年頃	ロ シ ア	31.3×27.0cm	玉川大学教育博物館
19	三位一体	Old Testament Trinity	19世紀	フィリピン	45.5×35.0cm	西南学院大学博物館
20	農民聖イシドロ	Farmer St. Isidro	19世紀	フィリピン	35.2×37.0cm	西南学院大学博物館
21	聖母子・諸聖人・磔刑・ 冥府降下	Virgin and Child, Saints, Crucifixion, Resurrection	19世紀～20世紀	エチオピア	35.7×49.8cm	西南学院大学博物館
22	受胎告知と ルーマニア十聖図	Annunciation and Rumanian Ten Holy Figures	19世紀～20世紀	ルーマニア	71.3×61.9cm	西南学院大学博物館
23	聖母子	Virgin and Child	19世紀	フィリピン	39.5×21.5cm	西南学院大学博物館
24	救済の聖母子	Redeeming Virgin and Child	19世紀	フィリピン	31.0×24.5cm	西南学院大学博物館
25	磔刑	Crucifixion	19世紀	エチオピア	16.7×10.0cm	西南学院大学博物館
26	聖ペトロと聖パウロ	St. Peter and St. Paul	19世紀	エチオピア	17.0×10.6cm	西南学院大学博物館
27	聖パスカリスへの奉納画	Dedicated Image to St. Paschalis	1927年	メ キ シ コ	28.4×19.5cm	西南学院大学博物館

－ 第10回 － 特別展関連公開講演会

《事前予約不要・入場無料》

◎日 時 2011年11月5日(土) 14:00～16:00

◎場 所 西南学院大学博物館2階講堂

◎講 師 ・安高 啓明氏(本学博物館学芸員)

「大学博物館の役割と西南学院大学のアイコン」

・柿崎 博孝氏(玉川大学教育博物館教授)

「アイコンの美と魅力ー玉川大学のコレクションからー」

西南学院大学博物館

大学博物館共同企画シリーズI アイコンー東西聖像画の世界ー

編 集 安高啓明

英文翻訳 中松沙織

編集補助 貞清世里 平川知佳 中尾祐太

中松沙織 小林史奈

発 行 西南学院大学博物館

〒814-8511 福岡市早良区西新3丁目13番1号

電話092-823-4785

発 行 日 2011(平成23)年11月2日

印 刷 株式会社 インテックス福岡



西南学院大学博物館

SEINAN GAKUIN UNIVERSITY MUSEUM

URL www.seinan-gu.ac.jp/museum/

 西南学院大学

一粒の麦から、
次の100年に向かって

